都合ヰスキイを三杯飲んだ。そのわりにはまはらなかつた。もう一杯ぐらゐ飲んでもいゝと思つた。――「良心」を痲痺させるためには、まだもう一杯ぐらゐ飲まなければいけないと思つた。――だが、私は、自分の席まで、長い道中をしなければならないことを考へてやめた。

國府津どころか藤澤までも持たなかつた。――大船でとまつたとき、私は、私の席で、先刻から旅行案内ばかりみてゐるある老紳士のとなりで、橋場や太田のところへ出す端書を書いてゐた。

時計をみると、まだ、九時すこし。――暗い空はまた雨になつた。（七年五月）

末枯

大正四年の四月、「中央公論」の特別號に十二三人の作者が、三四十枚の短篇で顔を揃へたことがあつた。その時、私は「今戸橋」といふ小説を書いた。前から考へてゐた盲の落語家とそのまはりに集まる友達だの贔屓だのを初め書かうと思つたのだが、その頃小説を書く上に少しはきちがへをしてゐた私は、ただその筋書だけを書いていゝことをした。出來あがつた結果は情ないほどくだらないものだつた。これではいけないと思つた。この材料をこんなちよろつかなことに片付けては駄目だと思つた。そこでその頃、「新小説」の編輯をしてゐた本多直次郎君に約束し、大正五年の新年號にその續篇のやうな形で、かた〴〵、そつくりもつと、長いものに書き直さうと思つた。だがその頃、ものゝ書けないさかりで、いくら爲事をしようとしても、てんきり爲事が出來なかつた。十二月の雜誌に「今戸八幡」といふ題の豫告までしながら、たうとうその新年號の締切りまでに一枚も書けなかつた。

そのうちに、「新小說」に改革があり、本多直次郎君が編輯をよしたのと同時に、その「今戸八幡」もずる〳〵に、書いてもよければ、また、書かなくつてもいゝやうな工合になつて殘された。結句それをいゝことにして、私は、執筆をやめた。で、本多君の後を受けて「新小說」に入つた田中君から更めて何か書かないかと言はれた時に、前の約束はけぶりにも見せず、外の短いものを書いて渡した。

この小說、「さゞめ雪」といふ小說だつたが、幸に評判がよかつた。すなはちそのうちに又何か書けと田中君から註文された、よろしい、そのうち又何か書かしてもらはうと返辭はしたものの、そこは私のことだから、翌々年の春までその約束は履行されなかつた。

何のことはない、その時分、色々の內憂外患でいさゝか腑が拔けてゐた。うか〳〵と埒もない日を送つてゐた。それには祖母が身體をわるくして、家の中の誰もが陰氣な顏をしてゐるまゝ、何としても落ちつけず、何をしても爲事が手につかなかつた。

さすがに少し考へた。いつまでこんな風だつたら仕方がない、何とかアガキをつける必要がある。——そこで漸くのことに健康を取りかへした祖母と一緒に、旅行をすることにした。十日でも廿日でも東京と緣を切り、了見を落ちつけて、久し振りに身にしみた爲事をしたいと思つた。

で、鵠沼へ出掛けた。何故鵠沼を選んだか、祖母とそこでどういふ暮し方をしたかといふことは、私の「妹におくる」といふものを讀んで下さればわかる。(この小說は收めて私の最近の短篇集、「青鷺」の中にある。)兎に角立つ前に私は田中君に會つて、少し長いものを六月の雜誌に間に合はせることを約束した。

この時だと思つて、私は、失敗した「今戸橋」の書き直しにかゝつた。「今戸橋」とはまるで調子をかへ、筋書でなしの、すべて描寫に終始しようと考へた。

「今戸橋」では盲目の落語家せん枝を主人公にしたが、今度はせん枝を貧乏にする客、鈴むらさんを主人公にすることにした——その時分の心持で、鈴むらさんが四五十萬の身上を費ひ果して、妻君と二人、今戸に逼塞して暮し、これも不運なうもれ木の扇朝といふ老

いほれた落語家を相手に、毎日酒びたしになつて暮すことよりも、また、そのために古い馴染のせん枝や三橘からだん〳〵寂しく離れて行くやうになつたのよりも、鈴むらさんが初戀の小よしと別れなければならないことになり、そのために身上を費ひ果すに至つたすぢみちに、私は私自身の或る目標を見出した。

一週間ばかりゐて祖母は東京へ歸つた、私は一人あとへ殘つた。毎日その小說を二枚三枚づゝ書いた。書いて行くうちに、よくしたもので、日に增しだん〳〵油が乘つて來た。だが、六月號の締切までには、豫定の半分もまだ書けなかつた。田中君にあやまつて、もう一と月待つてもらふことにした。

一度東京に歸つて、再び鵠沼へ復つた。中々思ふやうに捗取らなかつた。兎に角、文字通りわき目もふらず、それにばかりかゝつた。——だが、途中、鈴むらさんが時雨の降る日、扇朝を相手に色々世間話をしながら酒を飲む條へ來て、がつちり筆が閊へた。手も足も出なくなつた。私は空しくその未定稿を抱へて東京へ歸つた。

結局、もう一と月田中君に待つてもらはざるを得なかつた。慥かに途中まで出來てゐこと見せかた〳〵春陽堂の二階に田中君をその訪ねた時だ、忘れもしない、田中君が來月は原稿が出來たからいゝと言つて、何のいさくさもなしに承知してくれた。その出來た原稿といふのが、有島武郎氏の「カインの末裔」だつた。——私はその原稿紙に一行隔きに書かれた有島氏の、巧いしつかりした文字を見て何だか被壓されるやうに感じた。こつちが思ふやうに書けないひけ目があるだけにさう感じた。

『巧さうなものだね。』と私は田中君に云つた。

『うむ、面白いものだよ。』と田中君も答へた。

で、七月の十五日過ぎに漸く九十六枚だけ出來た。初めに書かうとした半分もそれは書けてゐなかつたが、兎に角私は、一と先づそれで打ち切つた。——その前後に「カインの末裔」は私の感じた通り文壇の大きな評判を呼び起してゐた。

だが、扨、漸くのことに日の目は見たものゝ、私の作は「カインの末裔」の半分も——四

半分も評判にならなかつた。平常つきあつてゐる二三人の友だちから、讀んだ、面白かつた、さういつた位なことを言はれたに過ぎなかつた。新聞の月評でも碌すつぽ相手にしてくれなかつた。さすがに寂しかつた。

九月になつた。その月のどの雜誌の創作評を見ても、やつぱり私の作は問題になつてゐなかつた。こいつは俺も沒落かなと思つた。と、その月に限つて後れて出た「新潮」に加藤武雄氏の短いけれど行き屆いた批評が出、「三田文學」に非汲清治君の、丁寧な、だが、作者には納得出來ないものゝある批評が出た。——それ等を讀んで、再び私は或る寂しさを感じた。

でも私は、割合にひるまなかつた。初めに書かうと思つたところまで、兎に角、書かうと思つた。で、「老犬」といふものを「三田文學」へ連載することにした。——連載といふことを考へたのは、一に「末枯」ほどの長さのものを再びそこに纒める氣力が、その時分、うそもかくしもなく私になかつたから。

だが、この約束も一と月遲れにおくれて、その年の十一月にも、十二月にも間に合はなかつた。翌る年の一月號にも間に合はなかつた。漸く書き出しの趣向がつき、原稿紙に向つたのは、二月號の締切を二三日も越した時分だつた。いくら「三田文學」が暢氣でも、今日よりはもう待てないといふギリ〳〵の日の午後、私はわづかに八枚だけ、五秋といふ俳諧師が途で知合の紅蓼といふ吉原の茶屋の主に會ふところまでしか書けなかつた。——忘れもしない、その午後、その原稿を速達で屆けたあと、市村座へ芝居を見に行つた。吉右衛門が「毛剃」をやつてる時だつた。樂の日で、役者達はみんな舞臺をそゝつてゐた。お客たちは却つてそれを面白がつてゐた。寢のたりない疲れた私は、芝居の中のその心持に折合へなかつた。

それから四五日して私は、火事に會つた。丸燒けになつた。萬年筆一本持出すことが出來なかつた。

思ひもかけず私は、橋場の友だちのところへ、當分厄介になることになつた。そこは曾

て、私が「末枯」の主人公のモデルにした人の住んでゐた近所で、私には親しみの多い場所だつた。曾て「末枯」の主人公が、朝に晩に寂しく歩いたであらう道を、私も朝晩寂しく歩いた。土藏のかげ、塀の外れに隅田川の流れか鈍い色を見せて眠つてゐた。

そのあと、私は一と月あまり大阪へ旅行した。歸つて來ると家が未だ普譜をしてゐる最中で、そんなこんなで「老犬」のあとをそのまゝ續けることは出來なかつた。暑さに向ふ頃、以前の心持を手繰り〳〵、再び更めて後をつゞけた。と、今度は割に筆が早く、秋の末までに、兎に角一段落つけることが出來た。殊に仕舞ひのせん枝の家へ鈴むらさんが訪ねて來るところは自分でも不思議な位早く書けた。

だが、「老犬」については勿論さう切れぎれに發表したのだから格別の反響はなかつた。たま〳〵あれば、私といふ作者をまるではきちがへてゐる月評屋さんの要もなき漫罵だつた。

以上が「末枯」と「續末枯」の出來るまでの話である。今にして思へばあの二つの作はその出來た當時に於いて可哀さうなほど不仕合だつた。迚も後年「名作選集」のお歴々の中に伍する光榮をこの作が得ようなどゝは夢にも思はなかつた。――だが、これは、私に言はせれば一に水上瀧太郎君のお蔭である。水上瀧太郎君が「貝殼追放」の中に「末枯の作者」といふものを書いてくれたことによつて、急にこの作が世間的になつたのである。――考へれば心細い話である。（十年四月）

『いのち』のページ

樂屋をいはなければ分らないが、「二つの死」といふものは、全體、私が最初みることをひきうけた二十篇のものゝなかにあつたものである。――こんなことをいふのは間違つてゐるかも知れないが、私が、これを灰野、島村、久米、河竹の四君のまへに提出したとき、私は決してこれが「最もすぐれたもの」になるだらうとは思はなかつた。

條件として、各自、ひきうけた、その、それ〴〵の二十篇のなかゝら、これはと思つたものを五篇づゝ抜きだすことを約束した。勿論、私は、それを容易なことゝ信じた。五篇と云はなくつてももつとあるだらうとさへ思つた。ところが、さて、讀んでみると、何としてもこれはと思へるやうなものに逢着しなかつた。どれをみても、ほとんどそのすべてが、アテギでかためられた、素直でない、讀んでゐてキマリが悪くなるやうなものばかりだつた。私はすこし張合が抜けた。同時に少しさびしい氣がした。

二三日して鈴木君にあつた。私は鈴木君にかういつた。

『私はあなたをうらみます。――選りに選つて、私のところへばかり出來の惡いものを吳れることはないと思ひます。』

と、

『それは可笑しい。――外の方々もさういふ意味のことをいつてゐます。』と鈴木君がいつた。

『おそらく、それは、外の諸君のは贅澤だらうと思ひます。――私のところのをみたら思ひなかばにすぎるものがあらうと思ひます。』

『よつほど酷いとみえますね。』鈴木君は笑つて『好いのがなかつたら二つでも三つでも構ひません。――皆さんもさうのやうな工合ですから。』

約束の日が來たとき、私は、切迫つまつたかたちで、ある田舍の醫者のことを書いたものと、ある薄倖な彫刻家のことを書いたものとの二篇を玄文社にとゞけた。――前のものは「結末と挿話」といふもの、後のものが、すなはち、「二つの死」だつた。

かくて、暮の二十七日、劇場の事務所の二階に關係者一同あつまつた。さうして審議を開いた。――と、みると、灰野君でも、島村君でも、久米君でも、誰も決して約束どほりにしてゐなかつた。ひとり河竹君だけが正直に數だけとつてゐた。だが、その、河竹君でも、周圍の工合をみると同時に、旗幟をあきらかにした。「無理をしなくつてもいゝのなら」と、五篇のものを三篇にした。――誰もそれ〴〵にその不作を嘆じた。

でも、とにかく、五人のものがさがし出した十二三篇の優秀なものがそこに置かれたのである。これくらゐなら片つぱしから本讀をして行かうぢやないかといふことになつた。で、河竹君がまづ、「萩原一座」といふものを讀み、久米君がつぎに「畫家とその最後の作」といふものを讀んだ。

聽いてゐるうちにだん〴〵私の心もちが變つて來た。といふことは、外の諸君の手にもそれほどのものがないといふことが分つたと同時に、自分のところの「二つの死」でもそれ

ほど斷念めたものではないといふことがだん〳〵私に感じられて來たのである。――眞面目な、カケヒキのない、とはいへ、理窟つぽい、芝居といふものに對する私なんかの考へとはまるつきりちがつたものを持つてゐるこの作が、そこにどう評價されるだらうかといふことの興味も私にするとあつた。

『私にはよく分らないところがあります。分つてはゐてもカナリうたがひを持たなければならないところもあります。――だが、舞臺協會の人たちに提供する脚本としてはかへつてかういふイキのものゝはうがよくはないかと思ひます。』かういふ前置をして私は、その「二つの死」を自分から讀むことにした。

十行二十字の原稿用紙で百八十枚あつた。とにかくそこに置かれたどの作よりもはるかに長いものであることはタシカだつた。讀むはうにしてもカナリこたへたけれど、聽くはうにしたらより以上、こたへたにちがひない。でも、諸君は、何ともいはなかつた。ときゞ〳〵の善意の半疊の外には仕舞まで、つひに何ともいはなかつた。

トガキのくだ〳〵しいことだの、臺詞の廻りつくどいことだのの外に、私にそれが分らなかつたことのブロンズとマスクの關係、新聞の記事の內容、欽也の死ぬ動機等がいろいろあとで問題になつた。――だが、詮ずるところ、「でも巧いぢやあないか。」と久米君のいつたことに、灰野君も、島村君も、河竹君も、異論がなかつた。それまでに出たどの作よりも、いゝものだといふことになつた。

續いて「首途」といふものだの何だのが讀まれた。だが、題材のうへで、また、技巧のうへで、どれもなほそれに及ぶものがなかつた。――審議の結果「二つの死」が「最もすぐれたもの」になつた。

再びいふならば、私にとつては全く思ひがけないことだつた。

原作のまゝでは長すぎる。舞臺のうへのものにするにはもう少し約める必要がある。――さういふことはすべて久米(秀治)がひきうけた。とにかく作者にあつて作者の心もちを聞いてみると久米はいつた。その日はそのまゝわかれた。

だが、私は、心配になつた。末のはうになると、彫像を毀したり、毒を飲んだりするけれど、それまでの運び、それまでの段取が何としても御難だと私は考へた。つねに二人で、廻りつくどい、ギゴチない、哲學ばかりをたがひに說いてゐる臺詞が果して劇場のなかの官憲を事なく通過するだらうかと考へた。――「困る」といはれゝばそれつきりの話である。

と、その後、春になつてから、久米が作者にあつて交渉するところがあり、出來るだけ約めて、二月の女優劇にやることになつたといふことを鈴木君から聞いた。――何のこともなかつたのである。

十七日の日だつた。三彩會のかへりにまだ早かつたからブラ〳〵あるいて劇場へ一寸寄つた。事務所の暖爐のまへに久米がいつものむづかしい顏を更に一層むづかしくして立つてゐた。私が入つて行くと、

『ま、彼方へ行かう。』とばかり、すぐに私を、三河屋の賣店に拉した。さうして、「久保田、俺は困つたぞ。」と開き直つていつた。

『どうして。』

久米の「久保田、俺は困つたぞ。」も久しいものだと私は思つた。――樂屋落だが、學校にゐる時分、いつの學期にも、久米は、平生ほとんど出たことのない倫理と教育の試驗を、眼のまへに控へたとき、始終、私にかういつた、外へ持つて行きどころのないまゝ私を擲へてばかり身の不仕合を嘆じた。

『どうしてつて、君。――俺は君のペテンにかゝつたかたちかある。』

『人ぎゝの悪いことをいふな。――なぜだ。』

『あの「二つの死」といふものをもう一度讀んでみろ。――箸にも棒にもかゝつたものぢやあないぞ。』

『だつて君が手を入れてゐるつていふんぢやないか。』

『手を入れてみて分つたんだ。――大體君はあれを何を書いた芝居だと思ふ。――頭きり

筋が通つてやしないぜ。』
『でも、君は、面白いといつたぢやないか。』
『だからペテンにがゝつたといふんだ。——君が讀んだときにはそれほどのことには思はなかつたんだ。』
『そんな分らない奴があるものか。——代物のいゝ惡いはしばらく措いて、とにかく、私は、舞臺協會の人たちにはあゝいふものゝはうがいゝと思つてゐる。舞臺協會の人たちなら、また、たしかに出來ると思つてゐる。』
『もし、その、舞臺協會の連中が出來ないといつたらどうする。』
『そんなことはない。』
『ところがそんなことがあるんだ。——舞臺協會の連中が出來ないといふんだ。——とても出來ないと引下つて來たんだ。』
『それは私は納らない。——さういふことをいふのを舞臺協會の人達のために私は惜む。』

『それはあの連中だつて責任を感じるからさ。——みす〳〵評判を惡くするやうなものはやれないだらうさ。』
『では聞くが、君はあの作を藝術的なものと考へるか、考へないか。』
『とにかく、それは、この間のものゝなかではさうだ。』
『われ〳〵があれを最もいゝものとした理由は認めるね。』
『認めるさ。』
『で、これを要するに、演るのか、演らないのか。』
『演る。——だから心配してゐるんだ。』
『何だ、演るのか。』
『何だ、演るのかぢやあないぜ。——中へ入つて俺はどのくらゐ口を酸つぱくしたか。——三方四方納めてあるく身になつてみろ。』
『とにかく私も舞臺稽古ぐらゐはみに來るよ。——責任があるから。』

『どうにか恰好だけでもつける必要がある。』

『だが私はそれほどに悲觀しない。――演りやうによつてある程度まで見物の心もちを攝むことが出來ると考へる。』

『だが、何としても俺は忙しい。』それには答へないでガッカリしたやうに久米はいつた。

いゝ加減もう紅茶が冷めたくなつた。何だか、私は、景氣が悪くなつたからホットキスキィを飲んだ。

その晩、はじめのつもりでは、時間をみて「難病デレテリヤ」といふものをみようと實は思つてゐた。だが、久米とその話をしてゐるうちに何となく、かう、うすら寒いやうな里ごゝろがついた。こんなときには早く家へ歸つたはうがいゝと思つて「難病デレテリヤ」は棄權した。

四五日して玄文社から電話がかゝつた。「二つの死」は宇野君がすべて責任を持つてやることになつた。ついては河竹君と私とにその相談役になることをいひつけるといふのだつた。

乘り掛つた舟といふかたちがある。私は何にもいはずに引きうけた。

宇野君のところへ電話をかけてどのくらゐ仕事が進んでゐるのか聞いた。――とりあへず、私は、原作にはさう指定してある、翠の、眞中から髪を分けるのと、義直の、ビロオドの洋服を着てトコル帽をかぶるといふ拵へとだけ止めて貰へまいかといつた。宇野君は無論さうするといつた。――それよりも欽也が毀す彫像を小道具でどんなものを拵へるかそれが心配だと宇野君はいつた。

さうでなくつても見物に同情されない芝居――同情されつこのない芝居である。ウッカリしたものだつたらカサにかゝつてその不細工さばかりを何とかいはれるにきまつてゐる笑はれなくつてもいゝことを笑はれるのはつまらない。

その晩、私は、新富座へ行つて喜多村にあつた。それは、嘗て、本郷座で、「大農」とい

ふ芝居をやつたとき、喜多村の役の彫刻家がやつぱり彫像を毀したことのあるのを私は思ひ出したから。

だが、生憎なことに、當人それについて何にも覺えてゐるところがなかつた。その幕が初日だけしか出なかつたことの外には何にも覺えてゐるところがなかつた。で、「大抵まあそれは悪落が來るね。」とあきらかに私の心配をつまりは承認した。

『悪落が來ちやいけないんだ。』

『いけなくつても仕方がない。』

『どうにかならないだらうか。』

『その彫刻の下に何を置いとくことは出來ないかい。』

『それは出來る。――出來るだらうと思ふ。』

『出來たらそこへ何かすぐ毀れるものを置いとき給へ。――彫刻を毀す、その彫刻が毀れて上から落ちるとき更にその下にあるものを毀す――その下にあるものゝ毀れる音を聞かせ給へ。』

『あゝさうか。』

『さうでもしないかぎりとても感じの出ようがない。』

そこに「芝居」の祕密があるといふやうな意味のことを側にゐた小山内氏がいつた。――とにかく私はそれを宇野君にまでいつてみることにした。

そのあくる日、二十三日の午後、稽古場で、久米の手を入れた脚本の校正刷をうけとつて驚いた。舞臺協會の諸君のとても出來ないといつたことの無理でないことを知つた。同時に私は私の責任――かういふものをさがしだしたことの責任をほんたうに感じた。

原稿で讀んだときにはまだそれほどに思はなかつた臺詞の晦澁さが、活字に組まれてハツキリ分つた。だがその晦澁さは、相手が舞臺協會の諸君だからそれほど心配することはないとしてたゞ、その、一人一人の臺詞の分量の何んとしても多きにすぎるものがある。

たがひにその相手の存在を否定するやうなかたちにさへそれがなつてゐる。とても持ちきれるやうがない。だが、それもなほ何うにかなるものとして、審議のときにも問題になつたことの、ブロンズとマスクの關係、新聞の記事の内容、欽也の死ぬ動機等のことがまだそのまゝに、手をつけないなりに殘されてある。それらのカシキをつけないかぎり、それらをすべてハッキリさせないかぎり、久米のいふ頭きり筋の通らないものになる。——更に演出の上からいふと、後半、義直と靜江が出て來ると同時に、翠といふものゝ存在が全く舞臺のうへにみとめられなくなる。欽也が彫像を毀しても、モルヒネを飲んでも、原作の指定によると、たゞ、義直と靜江とだけが始終それに搦むばかり、翠のうへには何の仕事も與へられてゐない。臺詞もなければ仕草もない。さういつてもサッパリしたものである。このあひだの翠をどう始末したらいゝかといふのが問題である。それと、また原作によると、幕ぎれに近く翠が欽也からブロンズとマスクの入つた新聞紙の包みをうけとり、その包みの紐を急いで解かうとする。解けない、欽也が落入るとき、翠もやうやくのことにその包みからブロンズとマスクを出し、自分の考へちがひであつたことを知ると同時に、「つんざくやうな破れた聲」で「これは……あゝ……」といつたきり床の上に倒れるといふことになつてゐる。だが、その段取にすると、幕ぎれの舞臺に中心が二つ出來ることになる。この二つの中心の折合をどうつけたらいゝかといふのが問題である。

だが、それらのことはすべて後にして——後の相談にして、とにかく、一度、讀合をしてみることにした。その日はじめてあつた作者の景山氏の手前、はじめは河竹君も宇野君も私も遠慮してゐたが、みす〳〵耳障りな、或ひは、用意なしにたゞ聽いてゐたゞけではハッキリ頭腦に響かないだらうと思はれる言葉のいろ〳〵出て來るのに考へ直した。景山氏に承知して貰つて、「親權」を「親の權利」、「へこたれる」を「驚く」、「僕はあなたにあなたの收穫をのぞむ」を「僕はあなたに謝罪をのぞむ」と直したのを手始めに、とりかへていゝ言葉はとりかへ、同時に、削つていゝ言葉、あつてはかへつてその心もちを、濁らせ、煩はしくする虞のある文句、たとへば、「誰だつて同じなんだよ。お前はまだ行きつくとこ

ろまで行かないからさう思ふんだ。親と子だけが――兄弟だけが一つ根から分れたといふ譯はない。誰だつて結局親類なんだ。仇敵同士だつて、詮じれば兄弟なんだ。たゞわかれ〳〵になつてから以來の時間がちがふだけだよ。」とある臺詞の「親と子たけ」以下の文句、「障害の多いほど征服の喜びが增す。解つたか。自我の超越にまで自身を高めるほど大なる征服はほかにはない。」とある臺詞の「自我の超越にまで」以下の文句「いろんな奴がやつて來るなあ――何しに來ました。」といふ臺詞の「いろんな奴がやつて來るなあ。」といふ文句、さうして、「僕は孤獨だつた。藝術に於て僕に獨自だつた。それ故に僕は僕の證言なしに僕の作物を僕の作物としてみることの出來うる獨自の君を君の中に期待してゐたのだ。そして見事に失敗した。云々」とある臺詞の「藝術に於て僕は獨自だつた」以下の文句のやうなものを、いろ〳〵、削つたり、省いたりした。

そんなことをしてゐたものだから、仕舞まで讀まないうちに遲くなつて、たうとう燈火がついた。私たちは構はないが、嘉久子氏と菊江氏は、夜、切の「戰勝踊」の稽古をしなければならない人たちだつた。あとはまたの日のことにして半チクのまゝその日はそれで稽古をうち切つた。

私たちは外へ出た。河竹君、宇野君、それに舞臺協會の諸君、みんな一しよだつた。曇つて、暗い、身にしみて寒い晩だつた。誰も外套の襟を深く立てゝあるいた。さうして、誰も、あんまり口をきかず、口をきいても今日の稽古のことにはあんまり觸れないやうにした。――すくなくも私だけは、白けた、張合のない、彈力のない心もちになつてゐた。

一緒に食事をしてわかれようといふことになつた。私は一も二もなく贊成した。何とか心持をかへなければ私はどうにもならなかつた。

熱い奴を二三杯飲んだことによつて少し元氣が出た。外の諸君もだん〳〵口がほぐれて來て話がにぎやかになつた。河竹君と加藤君とが、文藝協會時分のこと、「ハムレット」をはじめて演つた時分のことをいろ〳〵話し出した。いかにもそこに思ひ出が深さうだつた。それからそれとその時分の古い話が行はれた。――宇野君が當年の「とりで」の伊豆四郎君

であることも時にとつてのある可懷しさになつた。

話の面白いまゝに私は全く心もちを恢復した。私は戯談に「とにかく初日があいたらこのイキで弔慰會をやらう。」といふ動議を出した。

『それはいゝ。』と、河竹君も、宇野君も、加藤君も、森君も、横川君も、口を揃へてその動議を採決した。

『そのつもりで一つやるかな。』と、加藤君がその尾についていつた。

『やつて呉れよ。』と河竹君がいつた。『どうにかする。——どうにかなる。』

『私も量見を入替へた。——何といはれても構はないから私は纏める——失敗るつもりなら何とかなるだらう。』私はかういつた。

宇野君も森君も默つて笑つてゐた。

と、

『とにかく、弔慰會には、小道具にさういつて、額にみんな三角の紙でもつけるか。』と、横

川君がいつた。

『それもいゝだらう。』河竹君も、宇野君も、加藤君も、森君も、私も、カナリあかるい心もちで笑つた。そのまゝ私たちは十二時ちかくまで話しつゞけた。

二十五日から、毎日、願にかけて私は一時半と二時のあひだに京橋で電車を下りた。さうして稽古にかよつた。

『失敗るつもりなら何とかなるだらう。』私はさういつた。たしがにさういつた。だが、さうはいつても、なほ、失敗らなくつてもいゝなら失敗りたくない。出來るかぎり失敗りたくない。舞臺協會のために、來者會のために、久米のために、山本專務のために、さうして新しい芝居の前途——ほんたうの意味の新しい芝居の前途のために。——「久米のため」にといふのは、久米は私のまへでは敵役であつたが、あとで聞くと、うちに向つては主馬小金吾、一人でわれ〳〵のために悪戰苦闘してくれたのださうである。だがしかし、さうは

いつても、いかに久米が悪戰苦鬪しても、山本專務がわれ〳〵のしたことにみとめをつけず、われ〳〵を信じてくれなかつたのならば、どうにもこれがならなかつたのである。「二つの死」上演の闇から闇へ葬り去られなかつたのは一に山本專務の果斷によるものがある。——特に「山本專務のために」といふ理由である。

私は河竹君と相談した。宇野君と相談した。さうして、私は、あくまでこの芝居を寫實のものに扱ふまいとした。畫室にもその旨を通じて、「すべて日本室を無理に彫刻室に作り上げたる體」といふやうな原作の指定によらず、それほど貧乏つたらしいものでなく、割合に手綺麗な、感じのいゝといふことを大專にした道具を拵へて貰ふことにした。同時に、欽也をする森君にも、茂篤をする加藤君にも、義直をする横川君にも、靜江をする嘉久子氏にも、翠をする菊江氏にも、私はある程度まで、突つ込んで、調子を張つて臺詞をいふ必要のあることをいつた。さうして、なほ、原作のト書に必ずしもよらず、それ〴〵の必要に應じて、それ〴〵ある程度までのウゴキをつけていゝといふことをいつた。——要は、私は、對話のイキ一つにこの芝居の生命を托さうとしたのである。

さうするためには、それまで手を入れた以上に更に臺詞に手を入れなければならなかつた。仔細にみてみると、その臺詞の晦澁さといふものは作者が言葉の遊戯に溺れすぎたことの齎した結果で、たとへば、「——親は悲しむのです。嘆くのです。これが親の心でせう。無理はないと思ひます。これは血肉の愛着を歎く聲です。娘の將來をいつくしむ心です。更に娘の將來を危む恐怖に變るものです。」といふ如き、「僕は僕の藝術を藝術のために扱ひはしなかつた。人類の幸福のためにも扱ひはしなかつた。僕は僕自身を藝術のしもべにすることは出來なかつたのだ。人類のための勞働者にすることは到底出來なかつたのだ。——この意志の叫びのために僕は藝術を表現の手段とした。最も有力な道具として選んだのだ。美が表現の目的ではなかつた。久遠の實相をそのまゝに寫すのが僕の直接の目的ではなかつたのだ。」といふ如き、「虐げられ壓しつけられて踏みつぶされようとする生命の甦り躍りあがる勝利のかちどきが僕を誘惑した。ひしやがれ躙られた魂の呪ひに復讐の叫びが僕の

血に狂ほしい渦を巻いた。」といふ如き、せんじつめてみると、ほとんどその臺詞のすべてが、同じ意味のことを裏から、表から、右から、左から、幾重にもひかへいひ直してゐるのにすぎなかつた。力を強くするであらうはずのものが反つてそれを裏切つた。煩はしさ、くどさが、かへつてその反對の結果を持ち來すことを知つた。——幸ひに作者は私の横暴を許して呉れた。私は茂篤の臺詞で約二十五行、欽也の臺詞で約百行、改めて抹殺した。いゝ加減校正刷が眞つ赤になつた。——だがそのために（ことに彫像を毀す前後の欽也の半ば獨白のやうな臺詞をほとんど三分の一に減らしたから）翠の閑却されてボンヤリ立つてゐる間がそれだけ短くなつた。

削る一方ではまたあらたに臺詞を拵へた。ブロンズとマスクの關係の新聞記事とのことをハッキリさせるためにさうした。幕あきの道具屋と欽也との對話のなかに約四十行ばかりのものを織込んで、さうして、豫めその日の新聞にさういつた記事——欽也の千圓とつたブロンズの女の首は、全體ある女のマスクに鑄込んだもので、ほんたうに藝術的價値のある作品ではないといふやうな記事の出てゐることを暗指した。つぎに私は茂篤との對話のなかでも茂篤に改めてそれをいはせた。——勿論たゞ單に筋を賣るといふかたちばかりでなく、ある段層をそこに築いて行くことを私は考へた。

翠を舞臺のうへで死なせないことにした。欽也からブロンズとマスクの入つた風呂敷包み（新聞紙包みをよして黑い風呂敷包みにした）をうけとると、すぐ開けてみる。自分のまちがつてゐたことを知ると、そのまゝ、手に持つたマスクを床の上にうちつけて、何にもいはず、まつしぐらに外へ出て行くそのたゞならぬ樣子に、義直も、「翠、翠。」と呼びながら追て入る。さういふことにした。——さういふことにすると、同時に、舞臺に欽也と靜江と二人だけが殘ることになつて、欽也の、「お前には——お前には長い間世話になつたなあ。」以下の臺詞が森君に全くいひよくなるといふ結果にもなつた。幕ぎれだから、私は、森君にも嘉久子氏にも、思ひきり突つ込んで芝居をして貰ふことにした。原作では欽也が一人センチメンタルなことを長々といつてゐるのを、とくに、そのために、「あなた、私を捨

てゝは厭ですよ。」といふ一行と「あなた、私を連れて行つて下さい、私も一しよに連れて行つて下さい。」といふ二行だけのものとを合の手に靜江の臺詞として加へた。

そこへ義直が外からかへつてくる。さうして「長谷川、翠は——翠は死んだ。」と寂しくいふ。欽也はたゞ一言「さうか」といつたまゝだんだん意識がなくなつて來る。——義直が「長谷川、長谷川」と名をよぶ。靜江が「あなた、あなた。」といひつゞける。——甚だ申譯のないことながら、私は嘉久子氏にそこで泣き落すことにして貰つた。夫で幕が切れた。

——たま〳〵稽古をみに來てゐた久米が「久保田、お前は常盤座の舞臺監督になれ。」といつた。私は敢てそれを甘受した。

二十九日惣ざらひ、三十日は休んで、三十一日舞臺稽古といふことになつてゐた。だが、二葉町の若師匠が納らなかつた。惣ざらひの日といへどもあとでもう一度稽古を返した。さうして三十日にも此方だけは休まなかつた。——考へ深く、なんどりと、何としても得心の行くやうに、河竹君は、臺詞のいひ廻し、一々の細かい仕草について周到なダメを出した。茂篤のかへるところ、義直が入つて來て、欽也に難詰するところ、原作に書かれてあるものよりも味の深いものになつたのは偏へに河竹君の力である。

稽古のあひだに二度雪が降つた。雪がふると稽古場の窓のそとにみえる大きな黑い煙筒が何がなし私の眼に悲しく映つた。

舞臺稽古の日はじめて道具をみた。彫像をみて貧しさ見すぼらしさに今更のごとく失望した。同時に、私は、わざ〳〵新富座まで出かけたことを、さうしてその後そつくりそれを忘れ盡してゐたことを今更のごとくそこに思ひ出した。（八年二月）

『婦系圖』の稽古

「婦系圖」といふ芝居は、書下し以來、わたしの好きな芝居で、いろいろの役者のやつたのをみてゐる。三田文學へくはしい批評を書いたこともある。わたしならかうやるがと、最近本郷座で柴田月岡石川でやつたのをみたとき、一しよにみに行つた喜多村に話したのがそも〳〵の事の起り、今度市村座でこの狂言をやるに定つたとき、改めて話があり、わたしが稽古を引きうけることになつた。

二月の十日に松竹の新劇部から臺本をうけとつた。稽古をするためには、まづ、その臺本に手を入れる必要かあると思つたから。——ところがその臺本が本郷座で使つた臺本。——削りに削り、約めに約めた惡臺本だつた。わたしは書下しのものをみたいと思つたが駄目だつた。

條件として、前に開幕劇とつけ、あとに二番目を添へる時間の關係上、出來るだけ簡潔

にして呉れといふことゝ、從來の段取を出來るだけ殘して置いて貰ひたいといふことゝが、そのとき提議された。――あとの、從來の段取を出來るだけ殘して置いて貰ひたいといふ肚は、もしやわたしの手によつて原作に卽し、「婦系圖」といふ芝居の折角の出來上つてゐる面白さを毀しでもされては事だといふのにあるらしかつた。わたしは面倒だから二幕目の湯島天神と、三幕目のその待合とだけは、役者の仕勝手に任せ、わたしは決して口を出すまいと頭で約束した。

かね〴〵わたしの望んでゐたことは、序まくの緣日と、三幕目の一の酒井先生のうちとを何うかしたいといふことだつた。臺本をうけとると、すぐ、福井野紅君にあつて、道具のことを相談した。わたしの註文として、緣日をはつきり藥師の境內とし、書割に强ひて遠近をつけないこと、雨催ひの暗い晩にすること、酒井先生のうちは、今までのやうに二重でなく、平舞臺の、二階の客間といふこゝろで、外に廊下をみせ、廊下の手摺の下に庭の咲き盡した櫻の梢をみせること、あとでその道具を半廻しにし、廊下のつゞきをみせること、そのとき夕闇で、うしろの書割を火入りにすること、幕切に手摺のそとから落花を吹き込ませること等を福井君のまへに持出した。外には、序まくの三の柏家の裏手をすべて墨摺の繪のこゝろで行つて貰ひたいこと、三幕目の二の停車場の、いつもは正面にある改札口を上手へ斜めにつけて貰ひたいこと、正面に一二等待合室の入口だけみせて貰ひたいこと、大詰のおつたの臨終をめの惣のうちの二階にして貰ひたいこと等、いろ〳〵無理をいつた。幸ひに福井君はすべてを快く承知して呉れた。

わたしは臺本に手を入れはじめた。いつもの序まくの主稅のうちを出さない代りに、緣日へ河野英吉と宮畑閑耕を出し、阪田禮之進と會はして、一通りの筋を話させることにした。同時に、そこで、英吉、閑耕、禮之進、それ〴〵の人間を見物の前にはつきりさせる仕組にした。その三人の話の間に主稅を出し、それを避けるため古本屋のまへに足をとめさせるやうにした。そのうち三人が入ると、あと、古本屋と主稅との應酬になり、その途中に掏摸と禮之進の件を挾んだ。――道具にもさう註文したやうに、雨催ひの、人足の途

絶えがちな縁日だから、露店を出してゐる商人も、古本屋の外、飴屋だの、手遊屋だの、小間物屋だの、揚饅頭屋だの、なるべく騒々しくないものばかりを選んだ。たゞ一つ、幕あきに鴨綠江ぶしの讀賣を上手に置き、その前に七八人の仕出しを立たせ、唄の切れるのと一しよにその仕出しをぼつ〳〵散らばした。その間に小間物屋の見世を仕舞はせ、それを中心に揚饅頭屋と手遊屋に空模様の話をさせた。——その見世々々のアセチリン瓦斯のあかりを便りに、舞臺を出來るだけ暗くし、出て來る役者たちのすがたを、その前に、浮き上らせたいのがわたしの仕事だつた。鳴物は幕あきと道具替りにだけ使つた。

廻つて柏家になる。いつもは俊藏と主税とが改めて出て來るのを今度は舞臺つきにした。道具替りも、俊藏を送り出した小芳が再びかへつて來、主税と顔をみ合せて泣くだけにした。なまじひに臺詞をいはせないことにした。

柏家の裏手の、萬太と刑事との立廻りに按摩をからませる悪ふざけを除去した。

酒井先生のうちは、幕があくと、妙子が客間の大きな机をつかつて、本文の、八ッ橋と杜若の繪の清書を描いてゐる。そこへ主税が廊下から入つて來る。いつもの硯洗ひの件になる。「淺くとも清き流れ」を妙子にいはせないで、その代りに、主税の、「からごろもきつゝなれにしといふ奴で」のあとへ「はるゞ〳〵來ぬる旅をしぞ思ふといふんでせう。」と續けさした。間もなく小間使が客が來たといつて來る。妙子は机の上を片づけて階下へ行く。主税もあとから座敷を出る。——そのあとに俊藏と禮之進とを出していつもの通りの運びにした。

たゞ、わたしの註文として、禮之進をいつものやうな三枚目にとり扱はせなかつた。どつちかといつたら敵役の肚を持つて貰ひたいといつた。從つて、俊藏に飜弄されてもいつものやうに安くならず、やる方ない憤懣をそのまゝ自分に押へてかへらせることにした。

禮之進を送つて俊藏も一しよに座敷を出る。舞臺しばらく空虛になる。電燈がさびしくともる。と、やがて俊藏がまたかへつて來て、正面の唐紙をあける。そこに主税が手を突いてゐる。「早瀬、今の話を聞いたか、——靜岡へ行くお前への餞別だ。」と俊藏がいふので

道具が廻る。――こゝでもわたしは管々しいことをいはせなかつた。

廻つて、舞臺は、廊下のつゞきになる。上手から主税、下手から妙子が、ともに深くも

の思ひに沈んで出て來る。で、そこで、原作の、主税と妙子とのわかれの件をみせた。――

併し、幕切の、花を吹き込ます仕事は巧く行かなかつた。「花が綺麗に散るのよ。」といふ妙

子の臺詞に琴の音をかぶせて幕にした。

つぎの停車場では、わたしは、仕出しの使ひ方を工夫した。まづ、舞臺つきに、子供を

連れた夫婦づれをベンチに置き、それに離して外套を着た商人風のものを一人、改札口の

時計をみて立たした。同時に、改札口の外に助役と驛夫とに立話をさせ、幾分まだ發車に

間のある閑散な心もとをみせた。幕があいて、しばらく、夫婦づれの仕出しは、眠がる子

供をすかすこゝろでベンチを離れ、下手へ入る。商人風の仕出しも時間を消すこゝろで下

手へ入る。と、一二等待合室からめの惣が現れる。「此處だ〳〵。」と呼ぶので下手から主税

が出て來る。いろ〳〵家のあと片付をした話をする。これは今までの臺本にはまるでなか

つたのを、あらかじめ、深澤がめの惣をするのだと聞いて、深澤なら出來ると思ひ、原作

の長い臺辭をそつくり嵌め込んだ。そのあとには、また、英吉の母親と馬丁の貞造との關

係を(いつもは主税のうちでいはせてゐる)めの惣にそれとなく話させた。そのうちに下手

から母子づれの田舍ものが出て來るので、もうそろ〳〵時間だらうと、切符を買ひに行く

こゝろで、主税とめの惣は待合室に入る。田舍ものゝ仕出しがそこらをうろ〳〵してゐる

間に、下手から英吉と閑耕が出る。――これは、今までは、あとで妙子を誘拐する必要の

ためにのみ、英吉の母親や菅子を送つて出るのだか、今度は、急に母親や菅子が靜岡へか

へることになつたのについて、英吉が電話をかけて閑耕を呼出し、停車場であつて、前の

場の、禮之進が俊藏に散々飜弄された顚末を話し、先方がさう出るなら此方にも量見があ

るといはせ、かたがた主税を藥籠中のものにするために母親や菅子のその急に靜岡へかへ

ることになつたといふ筋を話させた。さうかうするうちに菅子の一行が遲れて到着する。

わたしは英吉の母親にも、菅子にも、こゝで多くを話させず、たゞ英吉の母親の思ひ上つ

た工合と、菅子のけば〳〵しい拵へとを見物に紹介するだけにした。勿論、原作の、汽車の中での主税と菅子との應酬を待合室でさせるやうな、無理な、あざとい眞似は出來るだけこれを忌避した。

間もなく時間が來て乘客の仕出しが、待合室から、また、下手から、ぼつ〳〵出て來る。赤帽が荷物を運ぶ。河野の一行が改札口へ入ると、待合室から主税とめの惣とが出て來る。改札口へ入る。下手からどや〳〵と仕出しが出て來る。それにまじつておつたが出て來る。主税がふとその姿をみつけるが、おつたはみられたと思ふと、すぐ、時間表を貼つた衝立のかげにかくれる。その間に、主税は、人波に押されて入つてしまふ、再びおつたが蔭から出る。改札口へ近づかうとするとき、遲ればせに下手から軍人が二人駈け出して來る。おつたは思はず身體を退ける。その際に軍人は改札口へ入り、それと同時に、驛夫は改札口を閉める。汽車の出る音が聞える。おつたは失神したやうに立盡す。——こういふ段取にした。河合の型の、驛夫に時間が間違つてゐるはしないかと聞くくだりは、そのあとの、妙子の出に使つた。

つぎの待合についてはいふことがない。はじめから投げてゐるくだりだから。たゞ、禮之進を三枚目でなくしたやうに、英吉も、今度は三枚目でなくした關係上、時代錯護の、あんまりだらしのない臺辭は取つたり替へたりした。

四幕目のめの惣のうちも、すでに出來上つてゐる幕だから、なまじつかの直しをしないことにした。たゞ、幕あきの、めの惣とその女房との喧嘩に、惡ふざけに墮したものゝあるのだけ手を入れた。それから、幕切の、妙子がうちへ電話をかけに行く件について、今までは、原作をそのまゝ、學校のかへりに内密で寄つたことにしてあつたのを、それではいかにも無理だから、「お母さまも御存じ」のことにして、わづかにその無理の幾分を救つた。そのはうが芝居の味の細かになることもあつた。

太詰の久能山は全くの失敗だつた。主税の靜岡に於ける生活をあの短い幕のなかですべてを片附けようとする事は隨分無謀なことだつた。だが、何としても時間の拘束があつた。

何とつかず、あゝいふ夢のやうなある情景を見物に感じさせるより外に手段はなかつた。わたしがもつと勝手を許して貰へるのだつたら、書下し通り、病院から、久能山、それから主税の塾、一々克明にさう運びたかつた。

おつたの臨終については、はじめに、いつそ主税を出すくらゐなら、幾分、また、おつたの呼吸のあるうちに出し、「主税さん、先生があつてもいゝつて。」と、ほんたうの主税のまへにその臺辭をいはせたいと思つた。だが、その案は方々で否定された。だから矢つ張呼吸が絶えてから出すことにした。その代り、あとで主税が出るとしたら、まるで主税の出ないことになつてゐる原作の俊藏の言葉をそのまゝ臺辭にうつす事はいけないから、かなりそこに手加減を加へた。それから幕切にめの惣の女房を次の座敷へ出して泣かした。

序でながら、今度のこの稽古にわたしが關係したとはかなり友だちの間の評判を悪くした。そんな暇があるなら怠けないで小説を書けと叱られた。わたしだつて泉さんのものでなければこんな餘計なおせつかいをしはしなかつた。（十年三月）

澤村源之助

二三年まへ、連鎖劇といふものが一時淺草に勢力を得たことがあつた。活動屋に買收されて、小さな芝居は、どこもこゝも連鎖劇を興行するやうになつた。はじめは强情を張つてゐたやうだつたが、そのうち、とう〳〵宮戸座もその運命の渦のなかに捲きこまれた。

『來年から宮戸座も連鎖になるんだつてね。』と聞いたとき、さすがに私は便りない心もちになつた。

今さらいふまでもない、源之助のゐた芝居、菊四郎のゐた芝居、勘五郎のゐた芝居。——そこの暗い、陰鬱な舞臺が、私の芝居をみる眼をあけて呉れた。今のやうに、歌舞伎や新富がのべつに開いてゐない時分だから、それには手近といふこともあつたらう、祖母が、始終、私をこゝへ連れて來て呉れた。

十五六の時分、小説を讀むことゝ、芝居をみることゝを固く禁じられたことがあつた。祖母は、私のかはりに妹を方々芝居へ連れて行くやうになつた。もとより一人で遠つ走りのできるほどの才覺はない。――その才覺があるほどだつたら、やみ〳〵小説を讀んだり芝居をみたりすることを差しとめられるやうなヘマは、やらなかつたにちがひない。――わづかに、私は、宮戸座と常盤座の立見をすることによつてみづから慰めに。

その時分、三木竹二氏が、始終、「歌舞伎」に宮戸座のことを書いた。――私は、子供ごゝろに、自分のことでも始終何かいはれるやうに嬉しかつた。

「三人吉三」だの、「姐妃のお百」だの、「蟒お由」だのといふやうな芝居。――もし宮戸座がなかつたならば、私は、おそらく、默阿彌や如皐の芝居の價値を一生分らずじまひだつたにちがひない。――默阿彌や如皐のかういふ芝居をみたあと、足許のあぶない階段を下りて、木戸をでると、冬の日はみじかい、四邊がもうどんよりと何處か暗くなりかけてゐた。潮の退いたあとのやうな寂寥がそこにある。私は、澤村源之助丈へ、市川

鬼丸丈へ、嵐芳三郎丈への幟の、風にはためいてゐる間を通つて公園へ出た。公園のなかには、もう、裸になつた木の間に、燈火がちら〳〵心細くついてゐた。――私は「すみだ川」の長吉のやうに夕暮を恐れてあるいた。

小説を讀んだり、芝居をみたりすることをやかましくいはれたけれど、結句やつぱり私は落ちつくところへ落ちついた。――ものを書くやうになつてから、屢々私は私の可懷しい屋根裏を訪問して、人知れずある泪ぐましい心もちになつた。源之助がゐなくなり、菊四郎がゐなくなり、さうして、大嵐の芳三郎はすでに故人になつた。殘るは當年の鬼丸の工左衛門ばかり。――そのときはもう宮戸座は、權三郎だの、高麗三郎だの、鬼三郎改め鬼丸だのといふやうな、若い役者の世界になつてゐた。だが、それでも、屋根裏の窓からみえる空の景色はかはらなかつた。さうして仲賣の商人や、下廻りの役者のなかには、まだ、古剛染の顏がそこに幾らも殘つてゐた。

一昨々年の春だつた。源之助がまたかへつて來て、默阿彌の「都鳥廓白浪」をやつたこ

とがあつた。私は永井先生と一しよにこの芝居をみた。源之助の松若、芝鶴の惣太、市十郎の十右衛門、さうして勘五郎の丑市だつた。先生もあとで、「大窪だより」のなかにお書きになつたが、歌舞伎や新富の舞臺ではとてもみることの出來ないやうな、情のある、心もちの纏つた芝居をそこにみることが出來た。序まくの向島の土手のだんまり、——その「露は尾花」の獨吟の可歎しさを何としても私は忘れかねた。續いて二月には矢張默阿彌の「戀闇鵜飼燎」をやつた。源之助の小松、芝鶴の文三、勘五郎の熊藏といふ役割だつた。私はこの芝居を見はぐつたら、再び、もう、默阿彌の散髪の芝居をみることが出來ないと考へた。さうして、また、永井先生とはるゞ〳〵大久保からこの芝居を見に來たことがあつた。

その後、また、源之助が去り、芝鶴が去り、さうして宮戸座はまた以前の若い役者の寄合身上になつた。狂言も新聞の續きものか、さうでなければ、あり來りの、なるべく手のかゝらないやうなものばかりをやつた。宮戸座は全く私にとつて用のない芝居になつた。私は再び屋根裏を訪問する機會を失つた。——時をり、前だけは通つて、返らぬ昔の可懷しさをいろ〳〵考へた。

だが、いよ〳〵その、活動屋の手に小屋がわたつて、改築がはじまつたと聞いたとき、どうにも私は、松島の角からさきへ足を踏みいれることが出來なかつた。私は私の宮戸座の——私の故郷の滅びて行くすがたを眼のあたりみるに忍びなかつた。

大晦日に近くなつて、すつかり連鎖劇の建物が出來上つた。私は怖々——文字通り怖々前を通つてみた。鼠木戸が除かれて、白い壁はすべて、赤い、花のやうな色に塗られた。黑天鵞絨の緣をとつた大袈裟な看板が掲げられた。櫓のまはりが電燈で裝はれた——でも、大抵はもう私は斷念めてゐた。だからそれほどには思はなかつた。たゞその建物を前にして、見世を閉めた茶屋の中菊が、いつもなら本飾をするところを、今年は形ばかりの笹を立てたゞけだつた。——私はその春を待つ限りないさびしさに心を惹かれた。

（『瀧の白系』の初日』より。——「三田文學」）

讀者は、何の爲めに、私が、數から棒にこんな拔きがきをしてかゝるのかとあやしまれるかも知れない。——源之助の生涯について話すまへに、淺草にある古い芝居の宮戸座について考へることをどうか私に許して頂きたい。

源之助といへば、宮戸座を思ひだし、宮戸座といへば、すぐ、源之助を思ひだす。——これはひとり私ばかりではないだらう。私ぐらゐの年恰好のものだつたら誰でもさうだらう。といふのは、源之助は、明治二十五年に、東京を離れて、大阪へ下つた。そのまゝ五六年といふものをそこですごした。——ふたゝび東京へかへつて來て、團十郎が「春雨傘」をやつたとき、丁山の役のためにまた歌舞伎座に出るやうになつた。——私はこの芝居をみたと覺えてゐる。だが、何としても、そのとき、私はまだ九つにしかならない子供だつた。

その後、彼は、歌舞伎座を離れて、東京のなかの、方々の芝居を轉々してあるいた。宮戸座へもでれば、明治座へも出、眞砂座へもでれば、東京座へも出た。中ごろ、一度歌舞伎座へかへつたこともあつたけれど、所詮は宮戸座に落ちつかなければならない運命がそこにあつた。

だが、新富座で役者になつた彼。——とにかく、團十郎の相手になり、菊五郎の相手になつて、世間からいろ〳〵に騷がれた彼。——騷がれたといふ彼を、どうして、私たちは、宮戸座のやうな芝居の舞臺に、み出さなければならなかつたのだらうか。——私は運命といふことをいつた。全體、どうして彼がさういふ運命に導かれなければならなかつたのだらうか。

安政六年の三月、源之助は、大阪で生れた。

助高屋高助の弟の澤村源之助が彼の父だつた。だが、彼は早くその父にわかれた。——西も東もまだロクに分らないうちに、彼は母親に連れられて、東京へ出た。

いふまでもなく、それは、助高屋を便つてのうへだつた。だが、助高屋は、あんまり身に沁みてこの甥の面倒をみなかつた。——彼は助高屋を離れ、彼の父が嘗て大阪で世話をした縁のある中村翫雀の手について、方々、旅をまはつてあるいた。

その後、旅からかへつて、田之助の小屋の澤村座へ出ることになつたが、ほどなくその澤村座が燒けたので、彼は、そのまゝ、守田勘彌の新富座の役者になつた。——清十郎といふ名で、身分は、中二階だつた。

明治九年の十一月。——彼の十八のとき新富座がまた燒けた。——だが、それは、假普請のまゝ興行をつゞけ、二年たゝないうちに、以前に增した本普請が出來上つた。——團十郎、菊五郎、半四郎、仲藏、左團次といふ顏で、花々しく開場した。

それから六七年の間が、守田勘彌の全盛時代であつたと同時に、新富座の全盛時代であつた。——その時代にあつて、彼は、だん〳〵幸福になつた。立女形の半四郎——默阿彌が嘗て、そのために、「小袖曾我薊色縫」の十六夜を書き、「三人吉三廓初買」のお嬢吉三を

書いた——がとかく病ひがちであつたまゝ、時をり、彼は、その代役をつとめた。身にあまる大役を引きうけて、しかも、彼は、かへつてその天分のあるところを認められた。——外にも、てうじだの、繁松だの、梅三郎だのといふやうな女形の役者が彼のうへにゐたのだけれど、なほ、彼は、だん〳〵、囑目されて、役がつくやうになつた。

十五年の二月に半四郎が死んだ。——その年の十一月に、彼は、名題になつた。同時に、亡父の名を繼いで源之助になつた。——そのときの狂言は、一番目が「黑白論織分博多」二番目が「僞甲當世簪」——兩方とも默阿彌の新作だつた。二番目で、彼は、京屋の娘おうらといふ主要な役をつとめた。——彼の二十五のときだつた。

そのうちにだん〳〵新富座の工合が惡くなつた。經營が困難になつて來た。大抵入があつてもいけないところを、時には、隨分、不入なこともあつた。——だが、彼にとると、さういふ世の中の來たことが、かへつてそこに都合のいゝかたちがあつた。——彼れはその時分のことを話してかういつてゐる。

引續いて新富座は全盛でしたが、芝居の位を高くするといふことについて、運動費のかさむところから、守田さんが借金だらけになつて了つて、役者までが判を捺すやうな譯でしたから、無人芝居でもいゝ役者を抱へることが出來ません。抱へるには金が入るし、その金は纏らないといふ次第で、それがために一寸した役は私の身體で間に合はせるやうなこともあつたのですが、どうせ團十郎や菊五郎に氣に入るやうには出來ませんけれど、そこは奥役が口を利いて、「どうぞ源之助で我慢をなすつて下さい」といふやうなことなんでした。しかし、この時代に役をさせて貰つたのが大へんな藥になつてゐます。

（『名家眞相錄』――「演藝畫報」）

二十二年の十一月に歌舞伎座といふものが出來た。彼は團十郎、菊五郎、左團次と一しよに、新富座からその舞臺開きに出勤した。だが、彼にとつてはかくべつ、何のこともなかつた。たゞその、あくる年の十月、嘗て新富座で當りをとつた默阿彌の「天衣紛上野初花」をそこで再演した。團十郎の河内山、菊五郎の直侍、左團次の金子市之丞、すべて書

下ろしのとほりの役割だつた。そのときに、彼は、かつて半四郎のやつた三千歳を引きうけた。――誰も、その、色つぽい、艶冶なところに惱殺された。

その後、神田に三崎座といふ小さな芝居が出來た。田村成義、坂野半十郎、それには、守田勘彌も關係して、興行をすることになつた。――馬十だの、幸藏だの、富松だのと一しよに、彼もそこへ出勤した。

これが彼の蹉跌だつた。

めづらしくはある、それには、本郷の春木座の燒けたあとではあつたまゝ、はじめのうちは大へん景氣がよかつた。面白いほど入があつた。だが、春木座の普請が出來たと同時にだん〳〵客足が落ちて來た。さうして、それが、挽回することの出來ない、どうすることも出來ない頽勢だつた。

太夫元がいよ〳〵滿足な身上を拂へなくなつたとなると、一座のうちには旅へでるものも出來る、外から、次第の分らない役者は入つて來る。――さうして、そのときは、もう、

守田も、田村も、疾うに手を引いてゐた。

知らないうちに、いつか、舟が沖へでゝゐた。身のまはりの景色がすつかりかはつて、すぐそこにあるとばかり思つてゐた岸の燈火さへ定かでなくなつた。——ユクリなく、彼はさういふ、便りない、いたましい境地に置かれた。

しかも、なほ、燈火がそこにみえたとしても、彼は、その燈火のそばへ舟を漕ぎもどすことが出來ないのだつた。——その時分にして、一度とにかく小さな芝居へでたものは、條件なしに、そのまゝ、大歌舞伎の舞臺をふむことを許されなかつた。——若い、賣出しの、ことには、それまで、身分より以上に幸福だつたものが、平の相中からまたやり直さなければならないといふことは、到底、彼の、忍ぶことのできるところでなかつた。

彼はかなり途方にくれた。

ちやうど、そのとき、菊五郎の大阪ゆきのことがあつた。其水の「神明惠和合取組」を持つて行くについて、辰五郎の女房の役のために、彼の身體が入用だつた。田村のはからひで、彼は、その大阪ゆきの一座のなかに加はることになつた。——辛うじて、彼は、救はれた。

「神明惠和合取組」といふものは、二十三年の三月、新富座での書下ろし、彼の辰五郎の女房は、そのとき、識者のあひだの評判になつたものだつた。

大阪。——大阪は彼の生れ故郷だつた。いろ〳〵の關係の贔屓が彼のまへにあらはれた。さうして、彼のために、出來るだけのことをしようとした。——それには、芝居の評判はよし、翕然として、人氣が、彼の身體にあつまつた。

興行をすまして、一座がいよ〳〵東京へかへるとなつたとき、彼は大阪に未練が殘つた。——贔屓の客と鴈治郎とに引きとめられたまゝ、ぐづ〳〵に、彼は、大阪にゐつくことになつた。

鴈治郎とは、鴈治郎の父の翫雀以來の關係があつた。

だが、彼の大阪の生活は、彼の考へたほど幸福なものではなかつた。彼を裏切る惡い運

命がつぎ〳〵に彼のうへに來た――彼の生活はだん〳〵放恣になつた。結句その放恣な生活が齎すところのものゝ爲に、彼は、煩はされ、惱まされた。

不幸にも鳩治郎さんが芝居へでられないことがあつて、しばらく一座をすることも出來すじまひでした。その後やうやく一しよに舞臺へ出られるやうになりましたけれど、格別香ばしいこともなく月日を送つてゐましたので、さうかといつて、今更、ボンヤリ東京へもかへれないといふ譯、道頓堀の芝居に出て、何のかんのといつて大阪に五年ばかりもゐたことになります。

その間には隨分貧乏をして、借金はかさむ、執達吏は來るといふ大世話場があつて、樂屋で使ふ鏡臺をはじめ、引幕までも書上げられたやうな譯ですから、たま〳〵金時計でも持つてゐるところを見つかれば、すぐにそれを取上げられて「時間さへ分ればいゝでせう」といふやうなことで、代りに流行おくれの銀時計などを持たせられたこともありました。さういふ風ですから、贅澤な服裝も出來ない有樣で、本當にみぢめなものでした。でも、家だけは相應なところへ入つてゐて、「斯ういふ體裁を張つてゐなければ、それだけの金のとれない見得の稼業です。」といふことに言譯をして置きました。ですから、持物などもうつかりしたところへは置かれないので、「伊勢音頭」の正直正太夫が金をかくす型から思ひついて、芝居からかへつて來ると、大神宮樣の神樂祈禱の箱のなかへ、紙入や時計や烟草入を隱して置きました。幾ら執達吏がやかましくつても、神樣だけには手をつけることが出來ません。とんだいゝ思ひつきで、毎日芝居へ出がけに、大神宮樣を拜んでは、その箱の中をあけて品物を持つて行き、また歸つて來ると、そのなかへ納めて拜んでゐたことがありました。それから、大阪に惡い病氣の流行つたことがあつてどこの芝居も客が來ないものゝ遊んでゐる譯にも行かないので、そのころ私のところにゐた河合(武雄)などを連れて、北海道へかせぎに行つたことがありました。

(『名家眞相錄』――「演藝畫報」)

その時分のことについて、彼みづからかういつてゐる。——「不幸にも鴈治郎さんが芝居へでられないことがあつて」といふのは、ちやうど、その當時、ある不測のわざはひから、わづかではあつたが、獄に下らなければならないやうなことが、鴈治郎のうへにあつた。

機會が來て、彼は、五六年ぶりに東京の土をふんだ。九藏、時藏、芝鶴、訥子たちと一しよに市村座へ出た。「鈴木主水」の芝居で、彼は、白絲をやつた。續いて、歌舞伎座に出た。「春雨傘」で、彼は、丁山をやつた。

東京の最員。——清十郎時代からの古い彼の最員たちのなかには、白絲をみて、さうして、丁山をみて、ある、いひ知れぬ寂寥に迫られるものがあつた。——といふのは、彼のこしらへのうへに、舞臺ぶりのうへに、暗い、濁つた、陰影のやうな雲がかゝつた。さうして、以前の、——五年まへ、六年まへの、張りのある、色の濃い、根ざしの深い生命が、悲しくそこに滅びてゐた。——いふならば、彼は藝術家としての、「苦惱」を全くうしなつた。

「春雨傘」のあと、彼が、歌舞伎座から離れたのについて、どんな事情がそこにあつたのかは、私は知らない。だが、大阪から持ち越した彼の生活が、落ちつきのない、感激のないものだつたといふことは疑ひをいれない。——何としても、彼は、「役者」として生きるまへに、「人間」としてまづ生きたいのだつた。

前にいつたやうに、彼は、歌舞伎を離れてから、東京のなかの、方々の芝居を轉々してあるいた。明治座、東京座、眞砂座、宮戸座。——なかで、明治座は、左團次、權十郎、小團次、壽美藏、升若たちの、うごきのない、勢力のある一座だつた。——彼は、しばらくそこに假のやどりをもとめた。

訥子、訥升、壽美藏、女寅、鬼丸、菊四郎。——彼がいよいよ宮戸座に落ちつくことになつたとき、これらの人々が彼のまはりにゐた。

それから四五年のあひだに、訥子が脫けて、小團次が來たり、壽美藏がゐなくなつて、時藏が入つて來たりした。外にも、松之助、鶴之助、勘五郎。——若いところで、宗之助だの、登升だの、三田八だの、勝太郎だのといふやうなところが入れかはり立ちかはりした。

ちやうど、そのころ、露西亞との戰爭の濟んだあとで、世間に、ある、强い、鬱勃とした心もちが漲つてゐた。同時にそれは、落ちつきと、纏りとをうしなつて、徒らに、たゞ何かをもとめよう——今まで彼らの持つてゐなかつた何かをもとあようとする運動ばかりがいろ〳〵起つた。いひかへればすべてが渾沌のすがた。——芝居にしてが、なほ、さうだつた。

歌舞伎座でも、東京座でも、明治座でも——どこでもあらそつて新作ばかりをやつた。必ず新作を中心にして狂言を立てた。勿論、新作といつたところで、大ていは虎彦あたりの書いた好いかげんなものだつた。だが、それでもよかつた。——そのうちに、また、だん〳〵歌舞伎座の舞臺で、高麗藏が「露營の夢」といふ歌劇のやうなものをやつたり、東京座で、芝翫が「己が罪」だの、「魔風戀風」だのといふ新聞の小說を脚色した科白劇——そのころの言葉でいへば寫實劇をやつたりするやうになつた。

上つ調子な、あかるい、稀薄な、さうして、色も、匂ひもない空氣に、萬遍なく、芝居の世の中がつゝまれた。

だが、東京は廣い。このときにあたつて、そこに、雨が降らうが、風が吹かうが、世間に全くかけかまひのない芝居があつた。すなはち宮戸座だつた。

「假名手本忠臣藏」「伽羅先代萩」「菅原傳授手習鑑」「近江源氏先陣館」「玉藻前曦袂」「御所櫻堀川夜討」「奥州安達原」「戀女房染分手綱」「傾城阿波鳴門」「極彩色娘扇」「由良湊千軒長者」「伊達競阿國戲場」「鶯塚長柄故」「播州皿屋敷」「東海道四谷怪談」「都鳥廓白浪」「三人吉三廓初買」「玆江戸小腕達引」「靑砥稿花紅彩畫」「巖石碎瀑布勢力」「御伽草紙百物語」で——始終かういつたやうなものばかりがそこの舞臺に上せられた。小團次でも、壽美

藏でも、時藏でも、鬼丸でも、さうして、源之助でも、——彼らは、たゞ、彼らの子供の時分からあるいて來た、暗い、寂しい道を、言葉ずくなに、誰も、眼をふせて、何といふこともなくあるきつゞけるのだつた。

「宮戸座」は東京のどん底にある芝居である。俳優も年よるまで彼方此方とさすらひあるいた末、疲れた身體ながらこの「都の底に築かれし劇場」にやつて來る。暗い空氣と明るい空氣との入りまじるとき、はるかに遠く拍子木が鳴つて、まさに開かれんとする幕は微かに顫へる。

そのころ、「明星」で、若い浪漫主義の詩人の吉井勇氏が斯ういつた。——世間に背いた彼らと、世間から忘れられた宮戸座とについて、誰でも、かうした、泪ぐましい、可懷しい心もちを持つた。

だが、そのうちに、小團次がゐなくなり、鶴之助がゐなくなり、さうして、また、時藏がゐなくなつた。——勿論、そのときは、もう、色どりの、若いところといつても、誰もゐなかつた。——彼のまはりはだん〳〵さびしくなつた。

鬼丸、菊四郎、それに、大阪から來た芳三郎。——この三人をたよりに、彼は今までどほりの興行をつゞけた。

前にいつた「戀女房染分手綱」「伊達競阿國戲場」「東海道四谷怪談」「都鳥廓白浪」「三人吉三廓初買」「青砥稿花紅彩畫」「御伽草紙百物語」などのほかに、それまで、彼の出しものとして、「蟒於由曙評仇討」だの、「新版越白浪」だの、「忠臣藏後日建前」だの、「友千鳥浮名香箱」だのがあつた。これらのなかで、ことに、「都鳥廓白浪」の松若、「御伽草紙百物語」のお百、「蟒於由曙評仇討」のお由、「新版越白浪」のお松、「忠臣藏後日建前」のお市、「友千鳥浮名香箱」のお富は、なみ〳〵ならず世間の視聽を惹いた。——彼のこれらの役々があつたために、どの位、宮戸座といふ芝居の心もちが、濃くされ、深くされ、さうして、惱ま

しくされたか分らなかつた。

それまでゞも、彼は、「忠臣藏」で判官をやり、「先代萩」で勝元をやつた。「袖萩」で義家をやり、「五斗」で泉三郎をやつた。屢々彼は立役を試みた。——だが、無論そこには興行師の方策もあつたらうが、彼のまはりに誰もゐないやうになる前後から、彼は、女形を離れて、だん〳〵立役をおほく手がけるやうになつた。

「梅雨小袖昔八丈」の新三、「隅田春藝者氣質」の梅の由兵衛、「鼠小紋東君新形」の稲葉幸藏、「與話情浮名横櫛」の與三郎、「三題噺魚屋茶碗」の蝮の次郎吉、「小袖曾我薊色縫」の清心後に鬼薊の清吉、「隅田川續俤」の甚三。——彼は、かうした五瓶や如皐や默阿彌の世話狂言、——小團次以來、菊五郎以來の世話狂言を、月々、取つかへ引つかへ上演した。

大ていどの役も評判がよかつた。女形の役者が、たゞ、立役をするといふことのほかに何かゞあつた。——押出しに、舞臺のうへの呼吸に、そゞろ五代目を忍ばせるものがあるといふことを誰もいつた。

だが、彼のその評判のよかつたことについて、私は、彼のそばに、鬼丸のゐたこと、菊四郎のゐたことを、改めていはなければならない。——彼が新三をやつたとき、鬼丸は彌太五郎源七をやり、菊四郎は家主をやつた。彼が梅の由兵衛をやつたとき、鬼丸は女房小梅をやり、菊四郎は源兵衛堀の源兵衛をやつた。彼が稲葉幸藏をやつたとき、鬼丸は松山をやり、菊四郎はおくま婆をやつた。さうして、彼が切られ與三をやつたとき、鬼丸がおとみをやつて、蝙蝠安を、彼のそばへまた返つて來た勘五郎がやつた。——そのあくる月、つづいて、勘五郎は「魚屋の茶碗」の蟒久太をやつた。

彼の安政六年の生れに對して、鬼丸は嘉永六年、菊四郎は安政三年、勘五郎は安政二年の生れだつた。——彼らは時を同じくしてこの世に來た。役者としての育ちからいつても、菊四郎は五代目の弟子、勘五郎は仲藏の弟子。——鬼丸は、全體は上方の人間ながら、早くから東京へでゝ來て、東京の役者のなかで苦勞した、——「時代」が彼らのあひだを結びつけた。彼らの歡びは彼の歡びであり、彼の悲しみは、また、彼らの悲しみであつた。——

江戸末期の作者たちの手になつた世話狂言の、暗い、憂鬱な黄昏の世界に、彼らのやるせない生命は、眼をみかはし、手をとりかはして、可歎しい彼らの思ひでを語り合つた。

四十三年の一月、彼は、宮戸座をで、明治座の、左團次、高麗藏の一座に入つた。——七八年ぶりで、彼は、日の目のあかるい世の中に連れ出された。

勿論、彼の最員は、彼のためにそれをよろこんだ。ことにそれが、彼にとつて緣の深い明治座であることを、左團次の一座であることをよろこんだ。——先代の左團次と彼との關係を、誰も、なつかしく思ひうかべた。

だが、彼のその七八年のあひだに、彼の古い馴染は、誰も皆、この世を去つた。權十郎、壽美藏、升若、荒次郎。——さうして米藏は役者をやめた。殘存(のこ)つてゐるものといつたらたゞわづかにひとりの小團次があるばかり。——おそらくは彼に、世間に背いてゐた彼のながい年月のことが、今さらのやうに寂しく、ふり返られたにちがひない。

左團次、小團次、高麗藏。——あとは、宗之助だの、秀調だの、又五郎だの、壽美藏だの、莚若だのといふやうな若いところばかりだつた。——秀調といふのは、嘗て宮戸座にゐた勝太郎のこと、壽美藏といふのは、矢張、嘗て、宮戸座にゐた登升のことだつた。

一番目「承久戰繪卷」二番目「享和春兩國紀聞」大切「俄石像」。——四十三年の一月の芝居はかうした献立だつた。「承久戰繪卷」といふものは岡本綺堂氏の新作「享和春兩國紀聞」は其水の新作だつた。さうして、この「享和春兩國紀聞」といふものは、彼のためにとくに書下されたものだといつてよかつた。

つゝもたせの後が强請。——彼のお島のいふ役は、彼の役として、型どほりすぎるほど型どほりの「惡婆」だつた。書きかたにも、深いところもなければ、新しいところもなく、かなり、知慧のない、散漫なものだつた。作としての評判はあんまりよくなかつた。——だが、先代の左團次と彼との關係に可懷しさを持つものは、更に、其水と彼との關係のうへに——其水の作と彼との關係のうへに、また、誰もある可懷しさを持つた。

まへに私はいはなかつた。だが、歌舞伎座を離れて、明治座に假りのやどりをもとめたとき、先代の左團次と彼とのために、始終、其水が二番目狂言を書いた。その時分、其水は明治座の座附だつた。

作の評判はよくなかつたが、彼の評判はよかつた。「艶はぬけたがやつぱり源之助だ」とか、「かういふ傳法な生世話のものは外に眞似てがない。」とか、彼は、世間からいろ〳〵いはれた。

彼をむかへた以上、明治座でも、月々、何か、彼を中心にした中幕なり何なりをやるに違ひないと誰も考へた。彼の最員でなくつてもさう考へた。だが、三月の芝居があいても、五月の芝居があいても、べつにそんな工合は何もみえなかつた。たゞ、彼は、高麗藏の「國性爺」に錦祥女をやつたり、左團次の「鑄かけ松」にお咲をやつたりするばかりだつた。

六月の芝居のときに「夏雨濡神輿」が出た。このときは、何かさういふ座の方針でもあつたのらしく、一番目が「菅原傳授手習鑑」の車引と寺子屋、中幕が「高時」と「本朝二十四孝」

二番目がこの「夏雨濡神輿」だつた。——彼の團七縞のお梶は「蟒於由曙評仇討」の蟒お由、「新版越白浪」の鬼神のお松、「忠臣藏後日建前」の蝮のお市とならんで、彼の「代表作」と許されたもの。——手のかゝつた、道樂の強い江戸狂言の、濃い、惱ましい心もちにつゝまれて、はじめて、彼の最員たちは、彼のすがたをそこにみいだすことが出來たやうに思つた。——義平次婆は小團次がやつた。

だが、この芝居だけで、彼は、ふたゝび用のある身體でなくなつた。九月の役居にも、十一月の芝居にも、彼でなければならないといふやうな役を彼はうけとらなかつた。岡本綺堂氏の「太平記足羽合戰」の女船頭、歌舞伎十八番の「矢の根」の十郎。——あとは、座附の秀葉の書いた他愛のない新作のなかの役々だつた。

四十三年がかはつて四十四年になつた。

年がかはつても、かくべつ、彼は、幸福にならなかつた。——春の芝居に、嘗て彼が先代の左團次とやつた其水の「櫓太鼓出世取組」の水髪お若をやつたあと、三月の芝居に、

近松の「長町女腹切」の半七の伯母をやつた。――ちやうど、そのとき、帝國劇場といふものが出來て、高麗藏と宗之助とをそのはうに引きぬかれたときだつた。折が折だけに、明治座は、冥寂と、もう、火の消えたやうになつた。

一番目が岡本綺堂氏の「村上義　」二番目が佛蘭西の芝居を小山内薫氏が飜譯した。「鈴」大切の坪内博士の「俄仙人」――「長町女腹切」はその中幕だつた。いつてみれば新作づくめだつた。――で、全體だれがこの「長町女腹切」を脚色したのかわからなかつたが、それは、たゞ、近松の原作の上の卷と下の卷とを、そのまゝ、書きかへ、うつしかへたものにすぎなかつた。さうして、舞臺のうへの、道具、衣裳、鬘、すべてそれらは久保田米齋氏の考證した「元祿」だつた。――彼は思ひもかけない芝居をやらなければならなかつた。

全體、私は、近松の原作をそのまゝやるといふことにかなりうたがひを持つてゐる。――といふことは、楠山正雄氏もいつだかいつたやうに、近松は人形芝居の詩人だつた。私はいま、それについて、くはしくいつてゐることの出來ないのを殘念に思ふが、要は「人形」のために書かれた作の形式と心もちとを、全く、そのまゝ、いまの芝居の舞臺に試みるといふことは、歌舞伎劇を離れた、歌舞伎劇と關係のない、ある新しい樣式の芝居をそこに拵へることにならなければならない。――「長町女腹切」の場合、勿論、脚色者は何の考へもなかつたのだらうが、何のそこに工夫もなく、細工もなく、たゞ原作を、そのまゝ、書きかへ、うつしかへたものであつてみると、甚五郎夫婦でも、お花でも、半七でも、おのづから、彼らは、歌舞伎の衣を脱いだ人間でなければならなかつた。

彼の半七の伯母にその用意がなかつた、――なかつたといふよりも、彼には、その用意が持てなかつた。彼の柄、持ちあぢ、臺詞まはし、――彼の歌舞伎役者としての修錬が彼にその用意を持つことを許さなかつた。

つゞまるところ、彼は、不評だつた。――だが、私は、下の卷で、彼が腹を切つてからあと、歌舞伎芝者の彼の悲しい眞實に觸れることが出來た。私は滿足した。

續いて、四月には、羽左衛門、段四郎、門之助、猿之助、龜藏が歌舞伎座から來た。さ

うして狂言は、一番目「妹背山婦女庭訓」中幕「修善寺物語」二番目「曾我綉俠御所染」大切が「小鍛冶」と「乘合船」――彼は、一番目で定高をやり、二番目で皐月をやつた。

定高はよかつた。やることに含蓄があつた。段四郎の大判事に對して遜色のない出來だつた。――だが、皐月は、思つたほどのことがなかつた。羽左衛門の五郎藏のまへに何としても彼と羽左衛門とでは、持つてゐるその「時代」がちがつてゐた。

九月の芝居には仁左衛門が入つた。で、狂言は、一番目が「四千兩小判梅葉」中幕「中孝染分縮」二番目が岡本綺堂氏の「箕輪の心中」だつた。彼の役は、一番目の富藏の女房のおさよと二番目の綾衣。――この綾衣が評判になつた。

だが、私にすると、彼の綾衣といふものは決して出來のいいものではなかつた。半七の伯母で失敗したやうに、彼は、綾衣で失敗した。どんなことをしても、どんなときでも、如皐や默阿彌の叛逆者になることの出來ないのが彼だつた。――綾衣の評判のよかつたについて、私は、世間の、見巧者とか、劇評家とかいはれる人たちの、思ひのほか便りにならないことを悲しく思つた。――彼らは、誰も、「箕輪の心中」といふ芝居にとつて、彼の綾衣がどんな誘惑になるかをさへ考へなかつた。

十二日の芝居には、「青砥稿花紅彩畫」が出た。勿論、彼が辨天小僧をやつた。小團次の日本駄右衛門、壽美藏の南郷力丸。――小團次の日本駄右衛門はしばらく措いて、壽美藏の南郷力丸と彼の辨天小僧とのうへには、前の、羽左衛門の五郎藏と彼の皐月とのうへにあつたやうなかなしい結果があつた。羽左衛門と彼との場合よりも、更に、それは、陰影が濃かつた。――それには、彼の、娘すがたの間、さうして、後の、藏前の、三尺一つの拵へになつてから、彼の老年がいたましく彼を虐げた、いふならば、彼は持ちきれないかたちがあつた。

四十四年はそれで暮れた。

四十五年の一月の芝居には、彼は、岡本綺堂氏の「品川の臺場」の矢場女房おたき、歌舞伎十八番の「不動」の遊女三吉野、「一刀流成田掛額」の茂々之井妻、「松梅梅雪曙」の下

女お杉をやつた。つゞいて、三月の芝居に、「伊達政宗」の乳人楓、「双蝶々曲輪日記」(引窓)のおはや、「一谷嫩軍記」(陣屋)の義經をやつたのを名殘に、彼は、明治座を退いた。

私はその理由を審かにしない。

明治座を出たあと、彼は、源十郎や宇十郎の弟子たちを連れて、旅をまはつたり、小芝居をあるいたりした。だが、さうかうするうちに、また、古い巣の宮戸座へかへつて、工左衛門と改名した鬼丸や、菊四郎や、勘五郎を相手に、以前のやうに、また、蟒お由だの、切られお富だの、またかのお關だのをやつた。

「歌舞伎の亡靈が髑髏の舞をやつてゐた。」——春の芝居の「三人吉三廓初買」をみて、長田秀雄氏が嘗てかういつたことがある。

あたへられた紙數は疾うに盡きた。——私は私の結論にいそがなければならない。

彼の名をいふと、誰も、すぐ、結び髪、襟のかゝつた辨慶の着付、白い蹴出し——おとみやお百の舞臺のあるときのすがたを思ひうかべる。源之助張といふ言葉さへある。——だが、おとみやお百に、かつて、「娘」の時代があつたやうに、彼にも、また、嘗ては「若女形」の時代があつた。「千本櫻」のお里だの、「菅原」の苅屋姫だの、「妹背山」のお三輪だのをやつた。さうして、彼は、彼のそれらの役々のうへに、始終評判がよかつた。

幸堂はおぢ氣ありて、氣組充分ならずといひ、竹の舍は本役とて座の光を增し、舞臺も廣く思はれたりといひ、褒貶まち〳〵なり。兎も角も當時のお三輪役者、どんな大歌舞伎に出しても、この人に限るべし。園洲は振巧なれど色氣なく、新駒は品好過ぎて、新藏はあら〳〵し。この人は少しけびたをところ田舍娘の風見え、こなし蓮葉にて色氣あり。官女にたしなめられ、扇にて左右より頤を推上げられし見得、可哀さうにおもは

れたり。竹に雀の振も好く、間がな隙がな奥へ乗をとられてゐる思入、團洲うつしにて申分なし。家へかへり、仕返しに來るといひつゝ花道へかかるところ、娘の情見えてしほらしかりき。然し花道にて嫉妬をみせたるところ、竹の舍は力ありて大に善しといひ忍月は穿ち得て好しといひたれど、余等は今一息とおもひぬ。こゝは新駒の方へ團扇を上げたし。終りに双に貫かれて、階の欄に寄掛りて「カリヤチイド」その儘の見えもよかりき。（『觀劇偶評』――「月くさ」）

彼のお三輪（二十四年三月壽座所演）について三木竹二氏が斯ういつてゐる。――「この人は少しげびたるところ田舍娘の風みえ――」といふあたりのことにして、苅屋姫はしばらく措く、お里が彼の出世作であつたといふことを私にたやすくうなづくことが出來る。ちやうど、その芝居のとき、「妹背山」のあとに「與話情浮名横櫛」がついてゐた。――故家橘の與三郎、故傳五郎の蝙蝠安、さうして、彼のおとみだつた。

故梅幸の當役にて、先年尾上多賀之丞の勤めしときは、大分非難ありしが、この丈は嵌り役にて申分なし。多賀之丞は湯上りのところ、手拭を下げて居られしが、この人はそのやうなこともなく、それに彼の上方訛に反して、江戸言葉の臺詞まはしにて、さら〳〵と藤八をあしらつて居らるゝ中、音羽屋を女でいくといふ氣組見えぬ。惡婆のやうなりと、幸堂のいはれしは、無理ならぬところあり。多左衞門との出合、あの情を捨てぬ氣か知らねど、あまりめいり過ぎたり。（『觀劇偶評』――「月くさ」）

彼のおとみについて、三木竹二氏はまたかういつてゐる。――「――音羽屋を女でいくといふ氣組見えぬ。惡婆のやうなりと、幸堂のいはれしは、無理ならぬところあり。」といふことが、早くから、彼の、五代目に傾倒してゐたことを語つてゐる。

彼には頭（てん）きり師匠といふものがなかつた。便りにした助高屋高助が全くたよりにならず

そのまゝ、彼は、誰のヒキもなく、新富座の、「他人」ばかりのなかに入つた。そこには、團十郎、菊五郎、左團次、半四郎、仲藏、外に、宗十郎だの芝翫だの彦三郎だのがゐた。

——彼はそのなかゝら菊五郎を探しだした。さうして、菊五郎によつて、彼は、彼の行くべき道をそこにみいだした。

——まづ最初役をうけとつてから、衣裳を一と通り聞いて、次は臺詞廻しを敎はつて、それから位置をやかましくいつてくれた人でした。「女形は亭主の役よりは少し下つて坐るものだ」といふことを度々いはれました。菊五郎さんが「あすこは斯うしなければいけない」といつて敎へてくれたところを、その通り守りさへすれば、必ず見物がほめてくれるので、成程と思つて感心してしまひますから、何をするときでも、聞きに行つては、一々手を取つて敎へて貰ひました。聞きにさへ行けば、決して厭といふことがなく、自分で立つてみせてくれました。——そこへ行くと團十郎さんは何にもいつてくれませんでした。いはないでも藝をさせてくれました。一すした話が、「菅原」の一日替りのとき、「道明寺」の段切で、私のかりや姫が道實をとめるところで、團十郎さんの道實はどこでとめても受けてくれますが、菊五郎さんの道實は、何足目でとめろといふことに定つてゐて、その足數を間違へると、道實もかりや姫も間がちがつてしまひました。その代り形ちはいつでも版で押したやうに定つてゐて、すつかり舞臺に嵌ります。團十郎さんの方は、少し位間がちがつても、それを穴のあかないやうに演活かして、かりや姫にも藝の出來るやうにその場で仕向けてつり出すといふやり方でした。——また「先代萩」のときに、團十郎の政岡、菊五郎の八汐で、私が沖の井をやりましたが、例の「色も八汐のもみぢ葉を」といふ臺詞で、八汐をいひ込めるところがどうしても巧く行きません。毎日、菊五郎さんからうるさく小言をいはれます。いはれゝばいはれるほど怖氣がついて、猶更うまく行きません。ですから、もう、見物をうけさせようなんてことは頭で考へず、うけるやうに出來てゐる臺詞を、何千人といふ見物にほめられるより、一人の菊

五郎にほめられたい一心でした。――菊五郎さんにいはれた小言は、ですから、今日でも人に敎へることが出來ます。菊五郎さんにいはれたり、菊五郎さんから聞いたりしたことが、一番藥になつたやうに思ひます。（『名家眞相錄』――「演藝畫報」）

彼はかういつてゐる。また――

隨分いろ〳〵な役をやつて來ましたけれど、私の身體にあるものとして出したのは、「切られお富」だとか「蟒お由」だとかいふ莫連なもので、自分では決してこんな風のものを得意にするつもりもなかつたのですが、若い時分から、意氣な服裝なんかゞ好きだつたのと、菊五郎さんの狂言につき合つてゐたのとで、知らず〳〵のうちにイナセな役所を行くやうになり、それが地になつてしまつたものとみえす。

（『名家眞相錄』――「演藝畫報」

だが、彼をさういふ役々のはうへ導いたのは、たゞに、菊五郎があつたからばかりではなかつた。彼のまへに三代目田之助があつた。――とはいつても、田之助が、惡疾のためにいよ〳〵起つことが出來なくなり、村山座で、「國姓爺姿寫眞繪」の藝子古今を名殘に舞臺を退いたとき、彼は、まだ、十五にしかなつたた。――そこに、以前田之助の附人だつた市川三すじが彼のそばにゐた。團十郎の弟子で、名題下の、身分は低かつたけれど、田之助のことにかけたら何にでもくはしかつた。田之助の「役」に對する解釋、「舞臺」のうへの用意。――彼は、いろ〳〵、深い、細かいことを三すじから聽くことが出來た。「蟒お由」と「切らさお富」。――彼の代表作と許されたこの役々は、ともに田之助の書下ろし、さうして、彼が、飽くまで田之助に則つたところのものである。

菊五郎と田之助、田之助と菊五郎、どつちでもいゝ、とにかくこの二人の持つてゐたものをうけ繼いだ彼の生命が、「色氣」と、「泪」と、「眞實」とに根ざしてゐることはいふをまたない。お由でも、お富でも、おせきでも、さうして、また「赤格子血汐船越」のかしく

でも、彼のいふところの莫連なものは、どれも、皆、「色氣」と、「泪」と、「眞實」とでかためられた役がらを持つてゐる。結び髪、襟のかゝつた辨慶の著付、白い蹴出し。――さういふ拵への、それらの誰もが、強請をやり、詐騙をやり、姦通をやり、殺傷をやるけれど、それらは、決して、貪婪でもなければ、冷酷でもない。殘忍でもなければ、荒淫でもない――「御伽草紙百物語」のお百にしてが、いふならば、彼女は「海坊主」といふ兇惡な、「運命」に虐げられ、呪はれた、よわく悲しい人間である。

「およしは、自分から、腕のほりものを見物をみせません。――大詰に、軍十郎に片袖をとられて、そこで、はじめて腕の彫物を見せることになります。」

およしの役がらについて彼はかういつた。

彼について、何か、「惡」の讃美をするものがあつたとしたら、もしあつたとしたら、それは、如皐や默阿彌の心もちを――「人間」を描くまへにまづ「境遇」を描いた彼らの心もちを全く考へないものといつていゝ。

彼の芝居に對する態度、世の中に對する態度。――彼の交友（舞臺のうへの）性狀、信仰。――私は、まだ、いはなければならないことをいろ〳〵持つてゐる、彼の舞臺についてもまたいひたいことが殘つてゐる。――だが、帳面のすつかりの締めくゝりをするのはまだ早すぎる。さう思つて、私は、歌舞伎座へかへつてからの彼のことについて、わざと、何にもいはなかつた。

帳面のすつかりの締めくゝりをするとき――再び、私に、もつと細かな、もつとたしかな彼の評傳を書く機會のあることを信じて、私は、筆をとめる。（六年十二月）

『小猿七之助』と『村井長庵』

明治座の「小猿七之助」

この春みた芝居のうちで何が面白かつたかと訊かれゝば、明治座の二番目、岡さんの『小猿七之助』とこたへるのに、私は、躊躇しない。

この作、はじめのうはさでは、默阿彌の『網模様燈籠菊桐』を書直したものだといふことだつた。だがそれは嘘だつた。私のみたところでは、どこにも、微塵、そんな氣はなかつた。

土臺今度の七之助は默阿彌の書いたやうな惡人でない。根からの惡いことをする人間でない。どつちかといへば、小心な、弱い、善良すぎるほど善良な人間である。——その小心な、弱い、善良すぎるほど善良な人間が三人まで人を殺すのである。

鹿島の手代宗吉のことはしばらく措く。かれが、その、白旗金太を殺し、お瀧の親お勢

を殺したのは、詮ずるところ、お瀧と戀に落ちたからである。およばぬこと、斷念めてゐたお瀧を思ひがけなく手に入れることが出來たからである。——かれはその戀を全うしようとした。どうにもしてその歡びを長く持ちつゞけようとした。——それには金が入用だつた。さき立つものは、皆、金だつた。

實の親の七藏が宗吉をイカサマにかけて捲きあげた八十兩。——それがかれの眼の前にあつた。かれはその金に手をかけた。と、横合から思はぬ邪魔が出た。さうして、かれよりさきにその金を持ち去つた。——かれにとつて、あまりに、それは、いはれないことだつた。かれが腹立たしさを感じたのは無理ではなかつた。

その腹立たしさがかれに人を殺させた。

だが、一方お勢にすると、お瀧の、事をわけての話によつて、出來たものなら仕方がない、好きなら添はせもしよう、さういつて、野暮をいはず、綺麗に許したのも、いつてみれば、娘が可愛いからである。自分を大切にして呉れる娘が可愛いからである。もしその相手に兇狀でもあつて、ためにその大切な娘の身に累でもおよぶことがあつたら取返しがつかない。それこそ親子揃つて泣きをみなければならない。——さう思ふのは人情である。事を未然にふせぐため、そこで、お勢は、知合の目明しにまでこれを密告した。

手先がかれに向つたとき、七之助は、その訴人の誰であるかを知つて、すぐに裏切られたやうに感じた。たへがたい腹立たしさが再びかれに來た。愛するが故にかれはお瀧を憎んだ。外のものには眼も觸れず、偏へにかれはお瀧をばかり追つた。お勢が、狂氣のやうになつて、また、それを支へた。——誤つて、かれは、お瀧のかはりにお勢を刺した。

所詮は運命である。もし、かれに、お瀧がなかつたならば、お瀧と戀に落ちることがなかつたならば、恐くは、かれは、若い、氣のいゝ、敏活な小舟乘として、何事もない、おだやかな、安氣な毎日を送ることが出來たのであらう。——作者は、その、かれの陰にもつれた運命の絲をわれ〳〵のために捌いてみせて呉れた。

これを講釋の『小猿七之助』にみる。七之助は山谷の小舟乘である。おたきは廣小路の

藝者である。七藏は網打で、博奕うちである。宗吉は新川の酒問屋の手代である。さうしてなほ、講釋にも七藏のイカサマにかゝつて身を投げた宗吉が七之助の船に引上げられる條があれば、燈明の丁字がはねて七之助の妹の眼に入る條もあり、なにがしといふ浮浪もの（白旗金太とはいはない）が隣の空家から佛壇の上に置かれた金を盗む條もあれば、おたきの母親が訴人して七之助の體を危からしめる條もある。だが、それとこれとは、全くその段取を異にする。私の記憶に若しあやまりがないならば、講釋では、たしか、船で宗吉を助け、そのイカサマの相手を網打の七藏と聞き、再び川の中へ突落し、そのあとではじめて七之助とお瀧との交渉が成立つのである。燈明の丁字がはねて妹の眼に入るのも後の話、七之助のしたことが報つたのではなく、七藏の惡業の結果がそこへ來るのである。隣から金を盗むのも後の話、七藏がもう發心して惡い事をやめ、イクヂがなくなつてゐるところへ七之助が來て、無理に金を置いてかへるのを隣に樣子を聞いてゐて横奪するのである。お瀧のおふくろが七之助を訴人するのも、そのおふくろが貪婪で、お瀧を喰ひものにする必要から、二人の仲を割くためにさうするのである。——要は、作者が、人物と、場面とを假りにそこから持つて來て、作者の息をかけ、揑ち直して、あたらしく、違つたものを拵へ上げたのである。——蓋し、作者は七之助によつて、お瀧によつて、また、お勢によつて、「人間」の悲しみを物語らせようとしたのではあるまいか。

全篇二幕五場。——隅々まで巨密な注意の行き渡らせてあるのは何といつてもこの作者である。岡さんである。ことには、運びの、素直で、無理のないこと、そつのないこと。——たとへばあの宗吉が七藏から掴みとつて來た手拭である、講釋だと片袖モギ取られる奴を町名の入つた祭の手拭にかへ、その轉々するのによつて段々筋の出來て行く工合の如き、卽かず、離れず、さうして、默阿彌にならず、きはめて自然な、五分も透かさない底の仕事である。

趣向の上でよかつたのは、序幕の船から、後の七藏の内にかはる間の暗轉である。暗い中に暮六つの鐘が鳴りつゞき、その鐘の音のかげに女の泣きごゑが聞えはじめる。やがて

明るくなると、七藏の内で、燈明の丁字が眼にはねて泣いてゐるお幸を長屋の者が大勢寄つて介抱してゐる。今までに時間の接續のこれほど巧みになされた場合は少いだらう。同時に暗轉といふことのこれほど有效に使はれた場合も少いだらう。

序まくの返しの元町河岸通で花道に仕事をさせたのもいゝ。だが、廻つてからの場の、あの、小村雪岱君が鏡花文庫の見返しに書きさうな書割はあれは何だらう。あんな變つた味のものでなく、あたりまへの、もつと不器用な感じのするものでなくつては、野崎の段切を彈く義太夫の三味線を合方にしたあの立廻りにそぐはない。

役々のうち、中車の七藏はよく役からをのみ込んでしてゐた。悪い奴になり切つてゐた。猿之助の金太は眞劍で見ごたへがあつた。齒切のいゝ臺詞も心もちがいゝ。私はこの人を歌舞伎座の腐つた空氣の中へかへしたくない。但し、警視廳の直しによつて、七藏の内の場にみせなくてもいゝ姿をみせることになつたのは、演る方にとつても、みる方にとつても損になつた。河岸通にはじめてその本體をみせるのでなければ作者の工(たく)みが失はれる秀

調のお瀧はどこか勝手の違ふところがあつた。紅若のお勢は難しい役をよくあれだけにしてゐた。思ふにこの人の寂しい柄が役に立つたのであらう。松蔦の妹お幸は莚升のお菊と役を取替へたかつた。といふことは、松蔦にお菊をさせて、壽美藏に八百藏のしてゐる由藏をさせたかつた。八百藏といふ役者は一つぱし自分で好い役者のつもりでゐるのが氣障である。もつと謙虚な心もちを拵つ必要がある。

ところで左團次の七之助である。この春みた芝居のうちで、この『小猿七之助』がどこの何よりもか好かつたやうに、この春みた役者のうちでは、左團次のこの七之助が、どこの、誰の、何よりも巧かつた。氣のいゝ、情に隘い、善良な、とはいへ、その職業から來る聰明さをうちに持つた役がらを、かれの、用意の深い、ウソのない藝で立派に纏め上げてゐた。そのうちでも特に眼に殘つたところを擧げれば、七藏の内を出て、醫者からかへつて來たお幸に出逢ひ、妹思ひの一筋なこゝろでこれをいたはり、或は慰める條(くだり)、大詰の藥師堂で案内の坊主の言ひたてを上の空にお瀧の來ることの苛立たしく待つ條等である。

私にいはせれば、左團次は、ただに「力」ばかりの役者ではない、また、「味」の役者でもある。私は世話もの役者としてのこの人に俟つところが多い。

市村座の「村井長庵」

『月冴堤置霜』――三幕目吉原土手道行の淨瑠璃である。繪本をみたとき、私は、『恨葛露濡衣』といふ賣込んだ名題のあるものを、何しに、こんな、いい加減な、季節錯誤な名題をつけたのだらうとうたがつた。――なぜならば、「ぬるる裳の露ならで、心置く身は雨空に、みだれて渡る雁さへも」とある條にだけ徵しても、この淨瑠璃の、暗く曇つた秋の夜を思はせるものであることが明らかであるから。

だが、幕のあいた時、『月冴堤置霜』といふその名題の決して見物を欺かないことを知つた。ただみる、土手のうしろ、一面、輝く月を持つた田圃の書割。――木立も、畦も、すべてその水のやうな月の光に支配されてゐた。――私は、念のために、「本舞臺向ふ高二重の土手、後ろ田町よりはすに吉原の屋根をみたる夜更の遠見、上の方に柳の立木、日覆より同じく釣枝、舞臺前に芒の土手板流の波板、「都て吉原土手下の體」とある原作の指定をもう一度讀返した。

で、幕があいても直ぐ岸澤の淨瑠璃にならなかつた。下手、土手の下から三次が丁字屋の若い者に連れられて出て來た。若い者によつて小夜衣の廓のぬけのことが話され、それに對して一つ二つうけ答へしながら三次が土手に上りかけると、うしろから豫め追つて來た手先が、突如として、そこに、十手を閃めかした。暫く立廻りがあつて、擲り、そのまゝ、また、三次は下手へ引立てられ去つた。――原作にはないことである。――原作では三次は大詰に缺込訴訟をすることになつてゐるのである。

その捕物のあと、はじめて下手に淨瑠璃臺があらはれて「引四つに月夜の廓も戀の闇」といふことになつた。――本釣鐘合方になつて小夜衣と千太郎とが花道から出て來た。

ここのところ、原作では、「上手より土手の上へ」出て來ることになつてゐる。さうして

「濡るるもすその露ならで」以下「歩み兼ねてぞ立休らひ」の間に土手から平舞臺へ下りることになつてゐる。――今度のは、逆に、花道から出て、舞臺にかかり、土手へ上るのである。――もし揚足をとるならば、この二人は、吉原から、どこを何う歩いてここへは來たのであらうか。

千太郎が癪を起す。小夜衣が介抱する。淨瑠璃の「そも突出しのその日より」以下、いろ〳〵クドキの模様があり、「お詑は草葉の影よりと、しほる袂の露時雨」で、小夜衣が手を引き、千太郎下手に小隱れる。そそり節になつて、上手土手のうへに田町の權次が（多分には判人であらう）が出て來る。さうして「今大門で話を聞けば」以下原作の三次の臺詞をそつくり代辯する。――その聲を聞いて、小蔭からわざ〳〵二人逃げ出しにかかるのを、權次が引据ゑて、トヾ「とめるもかよわき女郎花、情あらしの一ト吹に、折れてかよわき萩芒」の條になつたのである。――按ずるに、何も、不自由つたらしく、狹い、せせつこましい二重の上で芝居をしなくつても、原作にさへ準據すれば、平舞臺の廣いところで、幾らでも、好きに、樂に仕事が出來るのである。――權次が出て來ようと、土手の上と下で、たとへわづかでも二人が姿を消すには及ばないのである。

小夜衣が權次に拉し去られるので淨瑠璃臺を消した。同時に床の淨瑠璃になつて、下手土手のうへに久八のすがたが現はれた。うるさいやうだがこれを原作にみる。「また一ト吹の小夜風に、雨雪運ぶ秋の空、替る習ひの男氣も、替らぬ忠義久八が」と岸澤の淨瑠璃があらたな情景を呼び起して、著流し、好みの拵へ、思案の思入で久八が花道から出て來る。さうして「宵に土手で若旦那を、みかけた故にあとをつけ、茶屋の見世までいてみれば、女郎がさきに待つてゐて、うつゝ他愛もない有樣」と述懐の臺詞がある。――この間、始終、騷ぎの合方である。

今度の菊五郎扮するところの久八は全くこの臺詞を節略した。下手土手のうへから出て直ぐに千太郎に爪づき、さうして、直ぐに、それを、千太郎と知つた。尤も、原作には「抱き起して取形の、似たはもしやと見る折しも、雲間をいづる月影に、顏さし覗き恟りなし」

とあるが、今度のやうに頭きり月が出てゐるのでは、自らその必要もないわけではある。だが下手から出ようと何をしようと、「歸りを待つてとこの土手を、宵から幾度往つたり來た」りしてゐる心もちをその久八から求めることが出來ればまだしもである。たゞ、ほんの、通りがゝりに、偶々二人がそこに出會つたとしか思へないとなると、此奴、いさゝか問題である。——その點だけでも默阿彌の芝居の本質をわきまへないものといふことが出來る。

すでに花道の臺詞を拔いた位である。あとの意見の臺詞も思ひ切り短くされた。たゞ筋を運ぶだけのものになつた。從つて千太郎のはうでもくどいことをいはず、すぐに言譯なさの自害にかかる。久八がそれを支へることによつて、千太郎と二人、土手を下りたり上つたりする。——しかく動くことなしに、居どころで揉合つてこそあはれの深くなることを知らない仕方である。

久八が誤つて千太郎を刺す。と、その疵を隱すヒマもなく千太郎の息は絶えた。といふことは、千太郎が苦痛を忍びながら「そなたの知つたことでない、元より死ぬる覺悟といひ、我とわが手に突いた疵」以下久八との應酬が全く省かれてゐた。——「あの世を照らす常燈の、灯りも消ゆる夜半の露」もなければ「今は詮方亡骸へ、手向の水も宵の雨、木々の雫に袖ぬれて、唱ふ六字の無常音」もなく、千太郎の息が絶えたとみると、久八は、動顚して、轉ぶがやうに、土手を下り、「奉行所さして」花道へ入つた。——忠藏も出ず、三次も出ず、探り合のことは全くなしに、そのまゝ幕は引かれた。

一事が萬事である。——今度の『村井長庵』といふもの演出の、以て、いかに蕪雜であるか、粗笨であるかを傳へるために、この『吉原土手道行の場』の見たまゝを私は書いた。

これを要するに、今度の『村井長庵』は文字通りの『村井長庵』で、『勸善懲惡覗機關』でなければ、また、『村井長庵巧破傘』でもなかつた。默阿彌の香味はどこにも見出されなかつた。——蓋し臺詞（ことにmonologue）の節略、段取の改減、役者たちの臺詞廻しのう

への間違つた節奏、それらのものゝ齎した悪い結果とのみいつて今は止む。（九年一月）

三〇円

『御存知東男』

この一月小猿七之助を書いた岡さんは、今月、また、「御存知東男」といふものを書いた。——「小猿七之助」が一月みた、どこの、どの芝居よりも面白かつたやうに、「御存知東男」といふものも、また、今月みた、どこの、どの芝居よりも面白かつた。

座光寺源三郎、此村大吉、大河内善兵衛、横井甚兵衛、飯飼五太夫、——講釋のはうでいふ「本所五人男」(或は「旗本五人男」)である。このなかの、座光寺源三郎、此村大吉、大河内善兵衛の三人を拉し來つて、作者は、この作をなした。——それら、安逸な無頼な三人を描くことによつて、作者は、「人間」の生きること、——たがひにその生きることの悲しみをわれ〳〵に語つた。

序まく、柳島妙見堂裏、出村町喜六家奥座敷、同返し竪川筋撞木橋。二幕目、馬喰町大

和屋店、外手町大河内住居。大詰、小梅村おこよ家、十間川西河岸。——すべて三幕三場である。このうち柳島妙見堂裏で此村大吉の雨宿りをしてゐるのを仲藏がみて定九郎の拵へを思ひつく條、喜六家奥座敷でたばかられたことを知つた長五郎が因縁をつけに來る條、竪川筋撞木橋で此村大吉が大和屋の娘の難儀を助けてユクリなく簪を手に入れる條、大和屋店で大河内善兵衛がその簪と松平帶刀の首とを種に五百兩の金を騙る條、さうして大河内住居で善兵衛が拂方の圍みを切抜ける條、——それらは、皆「本所五人男」のなかにある「筋」である。たゞ講釋では、たばかられたことを知つた長五郎の因縁をつける相手が直接、源三郎だの喜六だのでなくて梶井主膳といふ易者（默阿彌の「夢結蝶鳥追」には使はれてあるが今度は名前さへ出て來ない。）であり、大和屋の娘を助けたのは此村大吉でなくて座光寺源三郎——場所も竪川筋でなくて榛の木馬場であり、さうして、また、大和屋の店に善兵衛の持ちこむ首は松平帶刀のではなく、大吉の親がそのために死んだ田後甚太夫といふ人間の首とある。

大詰の小梅村おこよ家と十間川西河岸とは講釋に全くみ出せない場面である。

作者はまるで縁のない二つの出來事を結び合せてその骨組をこしらへた。すなはち、善兵衛が大和屋で騙りをするのも、つまりは、源三郎が長五郎に無心をされた三百兩の金を調達するため。——かういふことになつてゐるのである。

ではその骨組のながに何が盛られてゐる。——「五人男」とよばれた彼らのなかの、飯飼五太夫は江戸を捨て、横井甚兵衛は非業な死にかたをした、そのあとの、三人の間の附合のだん〳〵滅びてゆく寂しさが盛られてゐる。

大河内住居の、三人が顏をそろへる條に、わたしは、彼らの泪ぐましい「友情」を掬みとることが出來た。

大詰のおこよの家は、おそらくは、作者が最も力を入れて書いたところであらう。善兵衛は行方知れずになり、大吉は大吉で發心して、かれを敵とする松平帶刀の忘れがたみの手

にかゝつてうたれる覺悟をしたと聞いたとき、源三郎は、今更のやうに彼みづからのうへが顧みられた。身分違ひの女と緣を結んだかれ。目前にあるものはいつかは來るであらう彼らの悲しい審判の日であつた。とはいへ、かれは、かればかりをたゞ便りにしてゐる女と思へば捨てるにも捨てられなかつた。斷つことの出來ない羈絆のためにかれは惱んだ。とゞすべてをなりゆきにまかせ、行きつくところまで行かうといふ覺悟が彼に出來たとき。——そのときはもう遲かつた。公儀の役人がかれのまへにゐた。それとみるなり女は自害した。——かれは、その、死んで行く女に心を殘しながら、女が嘗て鳥追に出たときに使つた笠で顏をかくし、いまはもう生きるに甲斐のない身體を役人の手に委ねた。

柿の落葉、高くなる鳴子の音。——鴉がけうとくないて、暮れてゆく秋のあはれが、源三郎をつゝみ、おこよをつゝみ、大吉をつゝんだ。

作者はこゝに竹本の淨瑠璃をつかつた。——それは、實に、竹本の淨瑠璃だけが傳へうる哀傷だつた。——わたしはいふところの床の淨瑠璃の效果についてはじめて敎へられるところがあつたやうに思つた。

役者もうまかつた。壽美藏の源三郎、松蔦のおこよ、ともに巧かつた。することに嘘がなかつた。——ことに、松蔦の、このごろ眼にみえて色氣の出て來たことをわたしはよろこびたい。

この二人の外では荒次郎の同心がよかつた。役にしようと思へば幾らでも役になるであらうこの役を、あくまで神妙に、あくまで謙遜に、あくまでつゝしんで演つてゐた。わたしは、この人の眞面目さ、頭腦のよさにいつも敬服してゐる。——それにつけても、わたしは、この人さへみれば下らない半疊を入れる大向——このごろの育ちの悪い大向の心なさを憎むのである。

壽三郎といふ役者、上方の役者として、以前は、もつと達者な、もつとうまい、もつと

イヤな役者だと思つてゐた。だが、このごろになつて、それがわたしの思ひちがへであることが分つた。思ひのほか不味い、思ひのほか素直な、思ひのほか固つてゐない、どつちかといへば、いゝ素質を持つた役者であることが分つた。ことに今度の大河内善兵衛をみてハッキリそれが分つた。東京で、それも今のまゝ左團次の一座で、暫くほんたうの修行をさせたいものである。

大和屋の店で、善兵衛が、見物に背を向け、おそのの婚禮の行列の出て行くのをみ送るところが、みた眼で、めづらしく、面白かつた。

いふならば、この芝居、キメのきはめてこまかい芝居である、チグハグなところのない、高低濃淡のない、さういつてもよく纏つた芝居である。このごろのやうに、ヤクザな、一人よがりのまやかしものばかり跳梁する世の中に、たま〳〵かういふほんたうのものをみ出すことが出來たといふことは——わたしは微笑の頰にのぼるを禁ずることが出來ない。

（九年五月）

『井伊大老の死』のこと

何がぞんざいだといつて中村氏の書く芝居ほどぞんざいなものもないだらう。

中村氏の書く芝居には、研究がない、穿鑿がない、工夫がない。——この作者の「小山田庄左衛門」いいふ芝居には、大石内蔵之助が軍配團扇を持ち、四十七士が引揚のときに陣太鼓を鳴らすところがある。

筋の運び、人物の出し入れ、萬事がその調子である。——臺詞と來たら、雅俗混淆の、時代、世話、現代語をごつちやにして、生硬、不熟、蕪雜きはまりない。

わたしは不思議にたへない、中村氏といふ人、春雨時代にはこんなに出たらめではなかつたはずだ。その「角笛」といふ短篇集は十六七の時分、わたしの愛讀したもの〻一つだつた。(その時分好きだつたものは、今でもなほ、好きだつたその理由をあきらかにみ出すことが出來る。)——それが西洋へ行つて來てからすつかりかはつた。まるでだらしがなくな

つた。締めくゝりがなくなつた。で、今度の「井伊大老の死」を讀んでもわたしは失望した。冗長で、放漫で、詮ずるところ矢つ張りぞんざいの四字に盡きるものだつた。

だが、早稲田文學に出たものにくらべると、天佑社から一冊になつて出たものは大分直つてゐる。それだけぞんざいさがすくなくなつてゐる。わたしの手許には、いま、天佑社本しかない。それによつて讀返し、とてもわたしに折合へないと思つたところを改めていへば、

一、臺詞の不味さ。——その底にながれてゐる生命の歌舞伎を出てゐないにも係らず、言葉尻だけをとき〴〵「です」とか、「でした」とか、その他、惡く現代にしてゐるわざとらしさ。

二、段取のあざとさ。——序幕も、二幕目も、三幕目も、掃部頭の獨白で幕を切つてゐる。相手かはれど主かはらずのかたちであること。——菊千代だの、愛麿だの、直麿だのいふ子役を隨所に使ひ、それらに可愛氣のない高慢つちやくれたことをいはせて强ひて芝居を

拵へてゐること。

三、おしづといふ役に、作者が、無知な、蓮葉な、ヒステリツクな女を書かうとして失敗したこと。(掃部頭、昌子の方、その他の人物にくらべて、この役だけにひとり理想化が足りなかつた。ために、その端下なさが徒らに可笑味に墮した。)——血の池地獄の諫言が拵へものといふ感じしかしないこと。

この外、細目にわたつて揚足をとるやうなことを數へ立てたらキリがない。

ところで上演の結果だ。——讀んだとき氣になつた條々が矢つ張氣になつた。矢つ張嫌だつた。

尤も、舞臺に上せるについては、時間の都合その他で、はう〴〵に剪除がほどこされた。二幕目の井伊邸居室と五幕目のはじめの場とは、ために、節略された。その結果、無駄が悉く省かれて調子が引きしまつた。同時に役者たちの巧さがおぼろげなものをハツキリさせた。思つたよりは面白い芝居が出來上つた。

序幕の押掛登城は、水戸前中納言、尾張大納言、水戸中納言をする役者たち（中車、傳九郎、三升）にそれだけの腹がないのでどこかちぐはぐな感じがした。返しの京囚江戸送は猿之助の賴三樹三郎あつて形がついた。二幕目の井伊家書院は、掃部頭が町奉行と寺社奉行とを相手にするところで、左團次が發揮した。返しのお靜の方部屋は、血の池地獄の趣向が根つから凄くなく、從つて秀調のお靜の頓驚さがいつそ莫迦〳〵しかつた。前の書院にも二人の子供たちが出、あとのそのお靜の部屋にもまたその子供たちが出るのをうるさいと思つた。しかもそれらが、前にいつたやうに、歌舞伎式の、子供らしくない、擽つたいことをいろ〳〵いふのだから堪らない。氣色が惡くなつた。四幕目の品川妓樓は兒戯にひとしかつた。返しの井伊邸宵節句は、掃部頭が衣冠束帶で雛壇に向つての長臺詞がなくなり、「鬼の宿」の狂言を掃部頭が自分でやるくだりが蔭になつて、思ひの外に落ちついた、しんみりした、パセティックな感じのする幕になつた。わたしにはどこよりも一番こゝが氣に入つた。大詰の櫻田門外は、あたりまへの立廻りにならないのが好かつた。返しの井伊家玄關先は歌右衛門の安藤對馬守で事を毀した。中車に演らしたらもし少しどうにかなつたらう。

これを要するに、どんな芝居でも、稽古をするものと役者とがしつかりしてさへゐれば、一通りはどうにかなるといふわたしの持論が今度でいゝ裏書をえた。（九年七月）

『二八の位』をかる。

大阪の役者はよく〳〵東京をあまくみてゐるとみえる。今度の新富座の『二つの心』をみてさう思つた。

なぜとといへ。

あんな、だらしのない、見當のちがつた芝居をみせるといふことは、自ら信じるところがあればあるだけ、なければないだけ、どつちにしても、われ〳〵東京の人間に多寡をくくつての仕事だ。

何が故にだらしがなく、見當がちがつてゐるか。

作者の魂を掴みえない演出、作者の生命に觸れえない演出。——そこには、たゞ、たゞ糊粉のやうな子供らしい衣裳の配色があるばかりだ。修飾のないぶつきらぼうな臺詞にとけあへない動きの、歌舞伎に墮したあくどい律動があるばかりだ。

新らしい試みがすさまじい。

福助、魁車、ともに氣の毒な人たちである。東京の演劇文化を知らない氣の毒な人たちである。（九年十一月）

『生命の冠』の役々

聞くならく、この作は、作者が、調子をわざと下げ、いまの舞臺、いまの作者をメドに書かれたものださうである。してみれば、これは、作者にとつては、試みである、ある試みである。――平俗にすぎ、お芝居にすぎるといふ批難は、誰よりもさきに、作者みづからが、しか認めてゐるにちがひない。――だから、私は開き直つて彼是いふことをしない。で、遠慮のないところ、讀んだときよりも、舞臺に上されてからのはうが、見優りがした。讀んだときにみえ透いてゐた生地、鍍金のところつ剝げのしたやうになつて殘されてゐた生地か、舞臺に上つて、ことごとくその見惡さをかくされた。偏へに役者が好かつたからである。假りに、これを、いふところの新しい役者たちの手に預けたとする、おそらくは、彼等の、「臭さ」「藝のなさ」が、この芝居を、寛ぎのない、工みのない、ギクシャクしたものに纏めあげ、私のいふその生地ばかりが、結句、われ〳〵のまへに露け出される

のが落ちだつたらう。私は、この作が、ところと、役者とをえたことを、まづ、作者のために喜びたい。

三幕のうち、讀んだときもさうだつたけれど、芝居になつても、二幕目が一番好かつた。序まくは、作者が、筋を話し、役柄を說くことにばかりいそがしく、慌しく、それにばかり氣をとられた結果が、きはめて、一幕を、ユトリのない、味のないものにした憾みがある。たとへば切口上で何かいつてゐるかたち、徒らに固くなつて、心もちのそれに添はない悲しさは、相踵いで起るとり〴〵の情景を、切れ〳〵な、緣のない、照應に乏しいものにした。それが二幕目になると。作者も安心するところがあつたのか、落着いて、こめかみでばかりモノをいはなくなつた。寬ぎがつくとともに潤ひが生じた。筋の運びにも無理がなくなつた。それだけでも役者の力の入れ甲斐があつた。三幕目は、讀んだときにはさのみに思はなかつた。私の好みからいつて醫者に哲學を說かせるあたりに慊らぬふしがあつた。だが、井上によつて、「別れの柿嚙り」の條(くだり)に、思ひもかけない面白い芝居をみることが出來た。幕切も好かつた。讀んだときには味へなかつたものを味ふことが出來た。ただ、醫者の哲學は、武田の不味さを以てした所以もあつたらうが、折角素直にすゝみかけた心もちの、ために、堰かれ、阻まれるものがあつた。理窟を離れ切ることの出來ないのがこの作者の病である。

役々のうちでは、矢張、井上の有村が誰よりも巧かつた。初日にみたときには、ところ〴〵、ハッキリしないところがあつて、さほどにも思はなかつたが、その後重ねてみたときには、隅々まで細かな深い心づかひを行き渡らせ、こゝといつて演どころのない役を「味」一つでみせてゐた。ことに、二幕目の欽次郎との論爭の條、原作には「二人殺氣立つて搦み合ひを始めようとする」とあるのを、井上は、欽次郎だけに殺氣立たせて、自分は何としても高飛車に出ず、あくまで、家長として貫目と、また、兄としての優しさとを失はないあたりの如き、原作の有村の未だ足らないところを補ひ、より humane な人間を描くことによつて、われわれをどこまでも納得させなければ措かなかつた。

井上についての出來は、藤村の欽次郎と、松永の片柳とである。私にすれば、松永の片柳を以て、近來まれにみる傑作としたいが、役の輕重からいつて、藤村の欽次郎のことをまづいはなければなるまい。いふならは儲け役、どの幕をみても、この芝居は欽次郎の演どころばかりである。藤村は、深くその役がらの中に沈潛して、あくまで、神妙に、着實に原作の欽次郎を描き出してゐた。この人、「酒中日記」の學校の先生をしてゐたときには、まだ、巧いと思はせながらに、アテギがみえ、うけさせたさがみえてゐた、今度の欽次郎にはそれがなかつた。わづかな間に役者を上げたものである。——但し、二度目にみたときより、初日のときのはうが好かつた。二度目にみたときには、三幕目の如き、成算が出來たとみえて、大分芝居をしてゐた。そこにまだ幾分の稚氣を殘してゐる。

松永の片柳は原作に描かれてあるやうな敵役でなかつた。赤つ面の敵役でなかつた。陰險な奸嬌な、ネチ〳〵した、みるから小策を弄しさうなイヤな奴であることが、どのくらゐ、この芝居に、自然性、眞實性を與へたか分らない。原作の、思ひ上つた、ガサツな、愛想つ氣のまるでない臺詞を、松永は、上方訛によつて、巧みにこれを緩和した。その物言ひの喋々しさと、その喋々しさのかげから、絶えず、相手を嘗め、相手を否定しようとしてゐる舉動の白々しさとが、この役がらのすべてを盡して、全く遺憾のない出來だつた、はじめの幕の絢子との應酬、二幕目の欽次郎との應酬も好かつたが、ことに、私には三幕目の「やあ、大將、いよ〳〵おわかれになりましたね」と、わざと愛想よく、前と少しもかはらない態度で、書類を擴げながら、階段を下りて來る前後が好かつた。原作によると、こゝは、欽次郎と絢子とが家のはうへ歸らうとすると「家のなかゝら片柳が傲然と出て來」て欽次郎をみ、「やあ、いよ〳〵おわかれだね」といふのである。いかにも工合が憎さげである。それだけ單純である。——私は松永の工夫を多としたい。

拵へにもそつがなかつた。拔け上つた額、手入をしない無精な髮、工まずしてその人物になつてゐた。

松永についての出來は花柳のおつるであらう。工夫をし、苦心をしたといふところから

いつたら、誰よりも、今度は、花柳が骨を折つてゐたらう。たゞ、その工夫、その苦心が、よく、まだ、ほんたうに消化れず、工夫が工夫にみえ、苦心が苦心にみえるところのあつたことを、私は、難としたかつた。併し、なほ、拵へ、顔のつくり、鬘の好み、仕草としては、はじめの幕の、幕ぎれに近く、得平を連れて外からかへつて來るところ、二幕目の、片柳の入つて來るのをみて、むしやぶり附き、突き飛ばされるところ、三幕目の、沈んだ情景のなかへ馬鹿笑をしながら馳けて出て來るところ等、出色の出來たるを失はない。

失敗は柳の厩生と小林の得平と武田の醫者とである。柳の厩生は、何としても、輕浮にすぎ、小才子にすぎた。これは作者にも責かある。この人間をして「恐がつてゐるのは鶏ばかりではないやうですね」といはせ、「ぢや、あなたはお嫁には行かれないんですか」といはせ、「僕はね、絢子さん、近い内に家を持たうかと思つてゐるのです」といふやうな、嫌味な、思はせぶりな臺詞をいはせた作者にも責かある、あんな女蕩しでなく、もつと、眞面な奥行のある人間にしなければ、失戀する絢子が可哀想である。また、内輪の苦しいことをうち明ける有村が氣の毒である。——それにしても、柳の、有村にその内輪の苦しいことをうち明けられたあと、犬の吠えるのを氣にし、雪崩の音に驚く前後を、いふところの可笑味にして仕舞つたのは亂暴である。心ないわざである。

小林の得平についても、私はこの役にあまり多くを語らせた作者に不滿を持つ、私は、出來るだけ、この役に、口を听かせず、たゞあるがまゝに、影のやうにのみ存在させたかつた。そのはうが、この芝居を隈どる陰の、濃く、深くなるものがありはしないだらうか、——かういふ量見を以てみるとき、小林の、妙に、その、調子づけていふ臺詞に、限りないわざとらしさが感じられた。

武田の醫者については、吾人、たゞ、新しい役者の度し難いことを歎じて止む。——誰が、いまの世の中に、客にうけさせることを大專にし、正面を切づて納るやうな心得ちがひな役者があるものではない。

深澤の網主はもつと巧くなければならないはずである。いさゝか膠着凝滯のかたちであ

る。木下の絢子、木村の昌子にいたつては、ともに、人間性に徹してゐない。——絢子の
の、着附の裙廻しの鶸色がどのくらゐわれ〳〵の視神經を刺戟したことだらう。(九年二月)

『その妹』をみて

有樂座で『その妹』をやると聞いたとき、わたしは、うまく行くだらうかと直ぐにうたがつた。幾ら勘彌が器用でも廣次はこなせまいと思つた。それは、盲目の仕草だの、だん〳〵ひがみ強くなつて行く運びの芝居をするところだのはうまいだらうが、そのまへ、肝心の廣次の心もち、武者小路式あるひは白樺式の畫かきの心もちに深く入ることが出來ないだらうと思つた。

とりあへずわたしは初日に四幕目までみた。殘念ながら思つた通りだつた。序まくがあいて、廣次と靜子とが口をきゝはじめると同時にこれはいけないと思つた。

まるで穿違へてゐる。原作の、ムキな、執拗な、粘り強い廣次の代りに、勘彌は、弱い、齒切れのいゝ、殉情的な廣次を描き出した。いひかへれば、暗さがなく、憂鬱さがなかつた。

つぎに、仕草、臺詞廻しの、おそろしくお芝居なのに驚いた。「狂藝人」の句樂にあれだけの自然さをみせたかれが何うしたことだらう、わたしはむしろ不思議だつた。序まくの幕切、「默つて俺のあとをついておいで」の引込のごとき、そゞろ「黄門記」の玄碩を思はせるものがあつた。

細工は要らない。強いてあがきをつける必要はない。たゞあるがままに芝居をすゝめて行けばそれでいゝ。原作にそれだけの用意がある。なまじに色をつけ匂ひを加へることは、武者小路氏の折角の味を掻きけすより外に役立たない。

よく解釋すれば、けだし、歌舞伎役者としてのかれの修練がそのさまたげをしたのだといへよう。悪く解釋すれば、歌舞伎役者としてのかれの世間の狹さが廣次のやうないきの人間に觸れうべくもなかつたのだらうといへる。

それにしても、序まくの、演説を妹に書かせるくだりが不味すぎた。わたしは、とくにその條(くだり)の、あざやかな出來ばえを豫想してゐただけよけい失望した。

あれでは暗誦だ。あれでは、たゞ、あらかじめ用意された言葉を話すだけ、悲しげに傷しげに話すだけだ。書かしてゐるうちに、われとわが言葉にさそはれ、次第に心もちの迫つて來る惱みがまるでみられなかつた。それに、原作の指定ながら、そのためわざ〳〵立上るのも滑稽である。

律子の靜子は仕草、臺詞廻し、勘彌に更に輪をかけたお芝居だつた。一々かたちをつけること、顔つきをすること、かの女の奉ずるところはすべて誇張にあつた。あくどい、臭い誇張にあつた。かの女が躍氣になればなるほどみるに堪へない結果が來た。——それよりも、何よりも、その柄に處女の清さを持つてゐないことが頭で駄目だつた。赤いものゝ目立つ拵へにもうそがあつた。

錦吾の西島はその熱心さが買へるばかりである。役者にして役が重すぎる。貫錄が足りない。西島の言葉を借りていへば精神が少しも顔面に生きてゐない。ために、芳子に向つて腹を立てるくだり、本を賣るくだり、靜子に近づくくだり、すべて悪落になり、可笑味

に墮した。み方によれば、この芝居、西島の芝居である。西島の悲劇である。すくなくも勘彌と同列の役者を以てしなければこの役は成立たない。同時にこの芝居も成立たない。わたしにいはせれば、西島を勘彌にさせ、廣次のためには宗之助でも選ぶべきだつたらう。

三吉の高峰は畫かきとはうけとれない。このごろの訪問記者によくあゝいふのがある。その口から、「生きることは苦しいとざをがいつたさうだが」といふ言葉を聞くのはかなり樂つたかつた。

これを要するに脚本を讀んだときのはうが面白かつた。脚本を讀んだときには武者小路氏の持つてゐる力が感じられた。芝居をみてもそれが感じられなかつた。それの代りに身賣の芝居でも見てゐるやうな甘さが感じられた。（九年九月）

新譯『霜夜鐘十字辻筮』

「――賢なるはこの柳蔭、木に竹を接ぐ今様ぶりも、師走の月の年忘」と語りに書いてあります。所詮は年わすれの洒落にすぎないといふのかも知れません。だが、私のみたところでは、演つてゐる人たちはそれ〴〵に種々苦勞をしてゐました。まじめに、皆、苦勞をしてゐました。

はじめ、「霜夜鐘」をやると聞いたとき、伊井の金助と六浦正三郎、河合のおむら、喜多村の杉田薫で、そつくり默阿彌の原作のとほりをやるものとばかり私は思ひました。餅搗芝居ならそれもいゝだらうと思ひました。ところが、よく聞くと、「霜夜鐘」は「霜夜鐘」でも、今度のは「新譯」で、新派の人たちのやるために、新派の人たちがやつていゝやうにすつかり書直したもの。――「宵によばれた茅町の」もなければ、「鬢のかをりか櫻香の、軒にかくれて拔いたかんざし」もなく、要は、「にごり江」で、嘗て、明治二十七八年ごろの氣分をみ

せたやうに、今度は、默阿彌を通して、明治十二三年ごろの氣分を――社會相をみせようとするのにあるといふらしいのでした。――思ひつきでないこともないと、私は思ひました。

だが、思ひつきでないこともないと思つたものゝ、話の經緯の、もう一つ、私に、腑に落ちないものがありました。それは、場割の工合をみるのに、序まくの芋坂以下、たゞ四幕目の石齋宅がないだけで、あとはすつかり原作の通り。――書直したといつて、果して、どういふイキの書直しかたをしたのだらうかと私は考へました。――どこまでも原作のかたちを殘して書直したのだらうか。――さういふ必要があるだらうか。――必要といふよりもさういふことが出來ることだらうか。――とにかく默阿彌の芝居の書直しは森先生の「會我」以來です。ことには、これは、「狩場曙」のやうな時代ものとちがつて世話の芝居です。世話も世話、われ〳〵の時代われ〳〵の主活と交渉のある、いふところの散切ものです。

――原作を讀みながら、あゝもするか、かうもするかといろいろに私は考へました。

その後、また、芝居の人にあつて、くはしい話を聞きました。その話によると、書直したといつても、それは、われわれの考へるやうなそんな億劫なものではなく、たゞ、原作の、七五になつてゐる臺詞を、あたりまへの、寫實の臺詞に書きかへたまでのものでした。

――といふことは、段取でも、工夫でも、あとのことは、すべて、原作まかせ、おかねと豐三郎の情死に清元をつかへば、杉田薫が幕を切るのに「わがもの」をつかひ、さうして三幕目の丹波屋では、原作が指定するやうに、諸事、袖萩の淨瑠璃で行くといふやうなわけでした。――私の思はくはすこし外れました。――それにしても、三枚橋の、宗庵と金助のくだり、寺跡の、金助とおむらのくだり、大詰の、薫と正三郎のくだり。――臺詞だけで、臺詞のアガキだけで持つてゐるやうなところを何うするつもりだと、私は、すぐうたがひました。

かうなると、たよりはたゞ演る人たちにあります。演る人たちの才覺たけにあります。

――伊井だの、河合だの、喜多村だの、東儀だのといふ人たちが、果して、この「新譯」にどういふ生命を附與するか。――どういふ演出をみせて呉れるか。――私は二日目に見

に行きました。

序まく根岸道芋坂。――題目太鼓の音で幕があきました。舞臺下手から上手へ上手から
また下手へ深く坂になり、坂の深くなるまゝに樹立もだん〳〵ふかくなつて行く工合に宵
闇の陰鬱さがありました。「上下草の生えし石垣、この上草土手、上の方畫心に阪の上り口」
といふやうなことになつてゐる原作の指定とは大分これはちがひます。仕出しの植木屋が
入つたあと、時の鐘になり、小田原提灯を持つた正三郎をさきに、子供を抱いたおなみが
花道から出て來るのは原作の通りですが、その、揚幕から出て花道を舞臺にかゝるあひだ、
そこに、二人のすがたに――伊井の正三郎にも、喜多村のおなみにも、なほ、舞臺に醸さ
れてゐる宵闇の陰鬱さが、影のやうに貪つてゐました。
舞臺に來て、正三郎がおなみを呼びとめ、不義のことをいひだすあたり、おなみが逐一
それを懺悔するあたり、言葉が直つてゐるだけで、いつてゐることは、さうしてそのいひ

かたは、殆ど原作とかはるところがありません。古くなるまい〳〵と、いろ〳〵に二人で
動きをつけた苦心を私はみとめたいと思ひます。――おなみが自害したあと、喜多村は、
いつものやうに短刀を咽につき立てたまんまで臺詞をいはず、とにかく一度短刀を咽から
離して、さうして、傷口を押へながら、長い臺詞をいひました。そこにも約束を離れよう
とした工夫が見られました。
おなみが自害してから、原作では、月が出ることになつてゐます。だが、今度は、仕舞
まで、闇のまゝ通しました。――これは闇のまゝ通すべきだと思ひます。終りにちかく本
釣をうちこまないのもそのほうが眞實だと思ひます。
廻つて不忍新土手。――原作には廣小路松源裏手の體とありますが、今度の道具は、う
しろ一面不忍をみた書割、それに上手に葭簀張の、見世を仕舞つたあとの茶店があります。
流行唄にて道具とまるとありますが、唄はなく、水の音で道具がとまり、上手から武村の
豐三郎と、磯野の猿藏、雪岡の勘六の三人が、紙入をとつたとらぬで愚圖々々いひながら

出て來ます。そこへ東の丹作が僞役人の拵へで出て來て、さばきをつけるとみせ、猿藏と勘六を逃がして、あとから自分も豐三郎をそこに突倒して入ります。——磯野の猿藏も、雪岡の勘六も、東の丹作も、三人とも、かういふ役をさして置いたらまちがひのない人たちです。たしかなものでした。

そのあと、豐三郎は身體を起して、脫げた羽織をそのまゝ、ボンヤリ花道のはうへ行きかけます。上手から職人體の仕出しが二人出て來ます。そこに羽織の落ちてゐるのをみて二人はそれを拾ひます。持つて、下手へ行きかけるとき、花道から豐三郎がまた引返して來て、默つてその羽織を仕出しの手から引つたくります　仕出しは驚いて下手に入ります。——かういふことは原作にはありません。誰の知慧か知りませんが悪い洒落だと思ひます。書生芝居の時分にはよくかういふ仕出しのつかひかたがありました。

その前後に清元がはじまります。「十六夜清心」です。豐三郎が舞臺に一人ボンヤリしてゐるところへ、「人目厭うてあとさきに、心置く霜川端を、風に追はれて來りける。」で、假花道から、花柳のおかねが出て來ます。——舞臺に來て豐三郎と擦れちがひます。

武村にしても、花柳にしても、さすがに、それは、淨瑠璃のその誘惑をうけませんでした。自分たちから、もとめて、その、淨瑠璃の世界に入つて行くやうなことはありませんでした。だが、段取のさういふ工合に出來てゐる以上、おかねが「どうせ私はしがない矢場の娘でございます。」といふと淨瑠璃のはうで、すぐ、「今更いふも愚痴ながら。」とうけます。——豐三郎が「おかね、許しておくれ。」といふと、淨瑠璃のはうで、すぐ、「ほんに思へば十六夜は」とうけます。——かういふ芝居をしなければならない二人を、私は、不仕合だと思ひます。だが、それはそれとして、武村の豐三郎は、拵へその他、あまりにそれが約束にすぎました。どこかに上州高崎の產らしい解釋があつていゝと思ひます。尤も、それは、默阿彌つ氣、清元つ氣をすつかり拔いたあとでなければ役に立たない註文かも知れません。——花柳のあかねは綺麗なのが何よりでした。

廻つて上野三枚橋。——時の鐘、水の音犬の聲で、道具がとまります。すぐ、上手から、

名越のうどんや、下手から、松本の與七が出て來ます。原作の通り與七がうどんやに提灯の火を借りることがあつて、うどんやは、そのまゝ、下手に入ります。——この、うどんやと與七とが、同時に、上下から出て來るのは知慧がなさすぎます。

だが、そのあと、下手から南のくるまやが空車をひいて出て、與七と擦れちがひかけ、呼びとめて、二人で豐三郎の話をするのは工夫だと思ひました。原作ではそれを與七が久八のイキで一人ごとにいつてゐます。——それには、空車といふもの、不思議に夜深さを思はせるものです。南もよくやつてゐました。

くるまやが入つてから、與七があるきかけて、石に蹴つまづいて轉ひます。手に血がついたので用水桶へ洗ひに行きます。足に何かさはります。とり上げてみると豐三郎の紙入です。——むら〳〵とそこで與七の量見がかはります。丑松もどきに「だが待てよ。」といふことになります。——以上原作の通り、折角前段のくるまやを出したのに感心したのがムダになりました。——寫實の芝居で、條件なしに、役者に問はずがたりをさせていゝなら、それで濟むものなら、世の中になんにも苦勞はありません。

宗庵が出て、與七に道をきゝ、哀れつぽいことをいつて與七に同情させます。五十錢の金を與七に惠まれてから、ともゞ〳〵上手のほうへ行きかけ、石に蹴つまづいて宗庵は轉びます。(この芝居はよく轉ぶ芝居です。前に與七が轉び、こゝで宗庵が轉び、あとの奥山のところでまた、正三郎が轉びます。)怪我をしやしないかと、與七がそばに寄るところを、紙入をとつて、アテ身を喰はせます。トゞ橋のそばへ連れて行つてしめ殺し、紙入を口にくはへて振返ると、トタンに、そこで、本釣をうちこみます。大向から「東儀」と聲がかゝります。——わが東儀氏も、眞逆、仲藏のあるいた道まであるかうとは思はなかつたらうと思ひます。

「宵によばれた茅町の」と、原作なら、なるところです。だが、今度は、さういふことはすべていはない約束です。だからいひませんでした。いはないで、たゞ、「宵によばれた茅町の米屋で、療治をしまつたかへりに手拭をくすねて來たが、屋號が尾張屋で、有松絞は

凝つてゐる。手拭だけにとんがロ上茶番だ。」とかういひました。――そのあとに、まだ、「手を濡らさずに七十圓」だの、「生れ故郷の九十九里へかへつて」だの、「なまぐさい漁師の金でも捲きあげ」だのと、いつてゐました。

原作を知らない讀者のために原作をこゝに抜きます。

「宵によばれた茅町の、尾張屋といふ米屋から、療治を仕舞つてかへりしな、頭痛を揉んだそのときに、天窓につかつた手拭を、そつと袂に入れて來たが、國の土産が有松染、金に鳴海の幸先よく、それが今夜の役に立ち、賣つたら五十か六十の、古手拭で七十圓、濡手で安房から上總を見晴し、八十日の苦役をして、汚れた身體の垢を落し、仕舞湯よりも溫つた、このほとほりのさめぬうち、生れ故郷の九十里、漁場に行つて一稼ぎ、百と二百の資本を拵へ、日分でも貸して暮さうか。」

要は、兇惡な無慚な宗庵といふ一人の按摩をそこに描き出せばいいのだと思ひます。――何の必要があつてさういふ問はずがたりを、それも徒らに原作を思はせるやうな、髣髴させるやうな問はずがたりをさせたのだらうと私はそれを疑ひます。

上手から金助が出て呼びとめます。宗庵の白ばつくれるのを、「降るかと思つた雨雲も、ぞつと身に染む夜風に晴れ、影さへ寥い冬の月」といふかはりに「どうとやらしてどうやらと、默阿彌流にごたくを並べるところだが、それはこちとらの柄ぢやあねえ。」といふやうなことをいつて金助は强請りかけます。――これも餘計だと思ひます。わざわざ、そんな、斷ることはないと思ひます。――洒落にもならないと思ひます。

だが、伊井の金助は「按摩さん、旨くしたね。」と宗庵の背中を叩くあたり、「俺に盲目の眞似は無駄だ。」と嘲るやうにいふあたり、「それをお前はいま知つたのか、目がみえながら惡い勘だ。」と飜弄するやうにいふあたりに、宗庵とのイキは少しあひかねましたが、伊井といふ人の持つてゐる臺詞まはしのうまさ、自由さ、特にそれは、色氣のない、色氣を離れた役がらのときにのみ限つて聞かれる、うまさ、自由さ。が、そこに、ありました――立廻りになつて、トゝ宗庵を突退け、「四國は讃州中の郡象頭山金毘羅大權現」といひなが

ら花道を逃げて入るのを工夫だと思ひました。

立廻りについては評なし。たゞ、そこのところ、原作には「時の鐘新内の合方に水の音をかぶせ」としてあります。今度は遠くで「こんぴらぶね〳〵」を彈いてゐました。これよりさき、宗庵が「宵によばれた茅町の米屋で」といふところで新内の合方をつかひました。

橋の上から杉田薫が急いで出て來ます。——出て來たところはさすがに水際立つてみえましたが、「一人は金毘羅參のやうであつた。」の、「こゝに杖がある。」のと、ぐづ〳〵一人ごとをいひながら、舞臺をのそ〳〵あるくのですつかり事を毀しました。「わがもの」の唄にしても、「今宵も最早十二時すぎ、うち捨置かれぬアノ三味線」といふ臺詞であればこそ「川風寒く千鳥なく」が役に立ち、「ア布告を知らぬ」と角燈をあげるのを木のかしらに「者とみゆる。」かういふ段取がついてゐればこそ、「待つ身につらき置炬燵」が效果のあるものになるのだと思ひます、構はず、それを、「今夜ももう十二時をすぎてゐるのに布告を知らないものにも困つたものだ。」といふやうな、ノベタラな、曲折のない臺詞にかへて、さうして、なほ、そのまへに、原作のとほりの合方を殘して置くといふことは、全くいはれないことではないでせうか。

臺詞もいりません。唄もいりません。たゞ、橋の上から急いで出て來る。角燈をあげて金助と宗庵の逃げて行つたあとをみ込む。——よくある奴です。——だけど、私は、それでいゝと思ひます。それだけでいゝと思ひます。

三幕目。安宿丹波屋。——原作の通り石川五右衞門釜の中の唄で幕があきました。舞臺、平舞臺、原作の正面暖簾口が暖簾でなく濃い淺黄いろのボロ襖、續いて、上手に、押入があり、階子口があります。「上の方九尺の二階」と原作にある二階が正面についてゐました。壁は濃い鼠いろ、いつものところには、門口でなく粗い格子の窓があつて、門口は、べつに、下の方に、丹波屋と書いて障子を立て、そこに、安泊と書いた行燈がかけられてあり

ました。――二階と階下との關係に無理があり、さうして、襖と押入とが書割ですまして あつたことにすこし滿足が出來かねましたが、だが、大體としては、すべてに約束を離れ ようとしたあとがカナリみられました。

幕があくと、石川のおくまが行燈の掃除をしながら、園爐裏のそばで煙草を喫んでゐる 下田と久保田の二人の六部たちを相手に話をしてゐます。――鼠壁の濃い色のまへに、そ の六部たちの鼠木綿の着附が冬の日のある憂鬱さを思はせました。

義太夫の話で、おくまが、そんなに出來るなら一段聞かして呉れといふと、下田のはう の六部が三味線さへあればといひます。おくまが、お豐のことをいつて、お豐の三味線で はどうだといふと、チト伯母さんでは工合が悪いけれど、そこらが旅だから、我慢をしま せうといひます。原作にはこれが、「チト伯母さんでは業語(たるい)けれど」となつてゐます。臺詞 がきにさう書いてあるのか、それとも下田が自分でさういひかへてゐるのか知りませんが、 此奴は是非、「工合が悪い」よりも「業落い」といつて貰ひたかつたと思ひます。「工合が悪い」

と「業落い」とでは少しその言葉の陰影(ニュアンス)がちがひます。

六部たちが飯屋へ出て行つたあと、チョボクレになつて、下手から磯野のお百が出て來ま す。話をしてゐるところにまた福島の泥藏が、おくまに賣りつけるつもりで、前の幕に猿藏 から買つた藥鑵を持つて出て來ます。――默阿彌といふ人は藥鑵一つでもムダにしません。

石川、磯野、福島、とり〴〵に、皆、巧いと思ひました。おくまの、色氣たら〴〵な、 何としても厭味つたらしい、それでゐて、また、なかなか拔目のないとりなし、お百ので たらめを飽くまででたらめらしくなくいふとりなし、泥藏の、始終よくないことばかりし ながら、どこかに、コセ〳〵した、安いところがあり、さうしてどこか女にはイクヂのな いところのあるとりなし。――いづれも工まずしてその役々になり切つてゐました。こと に、福島については、これが一番目の何とかいふ男爵をした役者かと思はれました。おく まに藥鑵の勘定を差引かれて、「俺はタヾだと思つたがそれぢや矢張世間なみだつたのか。」 といふあたり、とても、一番目で、臺詞に縛られ、「仕草」に引きずられ、眞實のまはりば

かりをぐる〳〵まはつてゐた役者とは全く考へられませんでした。

それにしても、おくまとその泥藏とのあひだの貸借關係には、戀愛についての問題、道德についての問題がいろ〳〵含まれてゐると思ひます。

下手から正三郎が子供を抱いてかへつて來ます。(原作には「抱子を懷へ入れ」としてあります。さうして、花道から出ることになつてゐます。)子供の買ひ手があつたとおくまに聞いて喜び、先方へみせるために、子供をお百に渡します。泥藏にすゝめられて羽織を買ふことにしました。

泥藏が出て行くと、あと時の鐘になります。おくまが燈火をつけにかゝります。正三郎は乳の粉の鍋を火鉢のうへにかます。——おくまが門にでて、門の行燈をつけるところへ六部たち二人をさきに、村田のお豐が三味線を持ち、小川のお竹を連れて、ぞろ〳〵と一しよにかへつて來ます。——灰いろのわびしい夕ぐれのなかにフト私は誘はれました。

だが、階下に燈火がついても、二階にはまるつきりつかないのはいけないと思ひます。

六部たちが上つたらウソでも障子に燈火のいろをみせる必要があつたと思ひます。

六部たちと一しよにお豐とお竹も二階へあがります。おくまも夕飯を喰べに奥へ入ります。舞臺に正三郎だけが殘ります。——間もなく三味線の鈍い音が聞えて、二階に袖萩の淨瑠璃がはじまります。「たゞさへ曇る雪空に。」といふことになります。

ところでこの淨瑠璃ですが、原作には、「お竹の語るこゝろにて子供と太夫の掛合の淨瑠璃になる。」としてあります。もと〳〵お豐の三味線で六部が語ることになつてゐるの故、太夫だけでもそれは構ひませんが、二階へあがるまへに、この間から雨でも降つたらさらつてやらうと思つてゐたところだから丁度いゝ機會だといふ意味の臺詞を、原作の通り、お豐がいつてゐるだけ首肯しにくいものがあります。

正三郎は、立つて、上手の障子のなかから手文庫のやうなものを持つて來ます。そのなかゝら位牌を出して回向をします。どこかで乳呑がなくのでハット思ひ、すぐ、正太郎ではないことを考へて安心します。——そのあひだの獨白に、獨白の形ちをあくまで離れよ

うとした腐心がみられました。「描く」のでなく「刻む」といふ感じを持つたものでした。

「不憫やお袖はとぼ〳〵と親の大事と聞くつらさ――娘お君に手を引かれ」で、笛の音が聞え、宗庵の出になります。――小道具の風の音にまじつてその笛の音が聞え、揚幕があき、和し形、低き下駄、宗庵の杖をついてとぼ〳〵出て來る前後、私は、そこに、默阿彌のまへに立つて、默阿彌の仕事に感心してゐる自身をみ出しました。――だが、花道でとまり、一度揚幕のはうを振返つて眼をあくのは折角の pathetic な心もちを裏切りました。原作にはさういふ指定はしてありません。

正三郎によばれてなかに入ります。原作の通り「お目にかゝつて御難儀の樣子がどうぞ聞きたやと探ればさはる小柴垣」で、正三郎のうしろにまはり、肩を揉みにかゝります。――勿論、淨瑠璃にかまはず伊井と東儀も事を運びますが、その場合の伊井と東儀は、前の、金助と宗庵の場合よりもよくイキが合ひました。たゞ、宗庵が眼を悪くしたいひわけをいふのに、無理な力業をして脾腹をうち、それで眼病を煩つたといひましたが、原作に

は「脾胃を揉んだそのせへか、不圖眼病を煩ひました。」としてあります。これは「脾胃を揉んだ」と是非いはなければならない。「脾腹をうつた」はすこし可笑しいと思ひます。

それから、この宗庵、羽織と財布を足で搔寄せ、ふところに入れ、小用をたすといつて外へ出るのに、下駄を履き、杖を持つて出ます。外へ出て、門口でその下駄を脱ぎそのまゝ、跣足になつて下手へ入ります。原作と反對です。原作では、下駄と杖を持つて外に出、門口で下駄を履き、花道へ入りかけて、そのまゝ橋がかりへ入ることになつてゐます。下駄を履いて外へ出るのは、勝手の知れないところより表へ出たはうがいゝといふ臺詞の手前、さし支へはありませんが、履いて出た下駄をわざ〳〵門口で脱ぐといふことは理由がないと思ひます。可笑味になります。可笑味になつて見物が笑ひます。――あすこで見物を笑はしてはいけないと思ひます。

東儀の解釋はそれほどの悪黨ではないといふところにあるのかも知れません。なるほど、安泊で、安泊にとまつてゐる客の持つてゐるものでも搔拂ふやうな奴です。大した奴では

ないとも考へられます。だが、それをいへば前にも茅町の米屋で「頭痛を揉んだそのときに、天窓につかつた手拭を、そつと袂に入れて來た」やうな奴です。――これは、どこまでも、彼が彼自身金助にいつた臺詞のやうに、いろいろの兇狀を持つてゐる、惡いことゝいふ惡いことをも散々仕拔いた、圖太い、始末にいけない奴といふ役がらにのみ準據すべきではなかつたでせうか。

尤も東儀といふ人の持味の邪魔をしたところもあります。ともすれば三枚目になりたがりました。たとへばあとの袴腰で改心してからの、五十錢か一圓ならどうか都合も出來るが、十圓と纏つては、盜みをするよりほかに道がないといふ臺詞が、徒らに思ひ切なるものがなく響いたことの如き、ひとへに持味の罪だと思ひます。

與へられた時間と與へられた紙數とが盡きました。――私は、たゞはじめからそれがいひたかつたことの、丹波屋の幕にユクリなく獸阿彌劇の新演出をみることが出來たといふことだけをいつて、あとは略します。（七年十二月）

正月の歌舞伎座をみて

一番目の「護國女太平記」(松居松葉氏作)といふ芝居はなんにもない芝居である。纏りの外にはなんにもない芝居である。面白くも可笑しくもない芝居である。深くも淺くもない芝居である。――一言以て片附ければ「表情」のない芝居である。

その責のなかばは役者たちの上にある。役者たちの氣のなさが、芝居を一層、味のないものにした。歌右衛門の御臺所房子、羽左衛門の將軍綱吉、我童の五の丸、權十郎の柳澤吉保、福助の女小姓富貴。――彼らは彼らたがひの役がらの間に釀される力を全く感じ合はない。

序幕は、でも、わりかた無事だつた。役者を別にすればとにかく筋だけはたどれた。思ひの外これは面白い芝居がみられるのかとも思つた。だが、三幕目になつて底が見えた。アタリがついた。同時に女ばかりの世界のいさくさの退屈さを感じた。わづか幕切の地震

をたのしみにしてそれにも失望させられた。――どこの國に、庭の立樹ばかりがグラグラ動き、數寄屋の屋體のそれにあづからない地震があるだらう。遠見の富士の噴烟に至つては子供だましも甚だしいものである。歌舞伎座の仕事ではない。

作者がいろ〳〵の人間の口からいはせてゐる世の中の惡さ、それが舞臺だけみてゐた分には影さへも投げてゐない。從つて「よきも惡しきも今月ぎりよ」の唄も何の强い響を持ち來さない。さういふ演出のうへの不用意によつて緊張するはずの三幕目が根つから緊張しなかつた。相踵いで起るとりどりの情景がみんなばら〳〵だつた。統一を統いてゐた。――富貴が狂亂のあげく身を投げて死ぬのは誰がみてもオフィリヤである。わざ〳〵「芽出し柳の蔭から」とまでいふ必要はないであらう。

役々のうち歌右衛門の御臺所は甚だハッキリしない、氣もちのかはりめもノベタラで引立たない。たゞみてくれだけのものである。羽左衛門の綱吉には量簡がない。いふならばでたらめである。だが義理の義理やくに芝居をしてゐるこの人(特にそれも新作の場合)を相手に何かいふこともない。――とはいふものゝ、大詰、弑逆の前後についてだけは一言いひたい。歌右衛門と二人、何といふ、あの、工夫のなさ、藝のなさであらう。

權三郎の吉保は市藏の役を急にかはつたのださうである。その度胸には感心するが演ることには感心出來ない。頭で役がらが摑めてゐない。千代之助の吉里は好い役がついて、當人は仕合だが見物は不仕合である。ともに役者としての土臺からかへるべきである。松蔦の奥方通子は間に合せである。二役右衛門佐の方がいゝ。

福助の富貴は、でも、だん〳〵人間らしい味が出て來た。だがもつと吹つ切れなくつては駄目である。狂亂の如き、カナリ、まだ、アガキのつかないところがある。――これは役者の惡いことではないが、その狂亂の間、この役に豫言めいたことをいはせるのが氣になつた。ために却つてあはれが失はれた。

中幕の「堀川」は仁左衛門が病氣を押しての出勤である。舞臺の瓦斯ストオブを焚き、藥を飲みながらの芝居である、痛々しくてみてゐられない。しかも、なほ、その病人が、白

々しい、ウソで固めていつもの仕事を開陳するのである。批評の限りでない。

二番目の「船打込橋間白浪」は市村座の「村井長庵」以上に、ダラシのない、やつてつけな、不手際な演出である、こゝの事にすれば、まだ、市村座のは、道理がついてゐる、辻褄が合せてある。しかくこゝの「鑄掛松」は默阿彌を冒瀆したものである。

默阿彌の作の細目——押切つていへば「無駄」——そこに默阿彌のほんたうの生命はかくれてゐる。それに手を入れ、刈込んで、偏にたゞ筋だけを通す——つまりはだしがらだけを殘すのである。うまい不味いの沙汰ではない。

だが、手を入れ、刈込んで、筋だけを通す。——それだけならまだいゝ、今度の「鑄掛松」は、そのうへにまだ運びをさへかへてゐるのである。すなはち、二幕目の妾宅、本來なら三四度かはる場面をたゞ一杯の道具で濟まし、時間その他の段取をすべていゝ加減なものにしたばかりでなく、松五郎がお咲を脅かすに當つて、原作のお咲のはうで、その、闕宿船で逢つたことを思ひ出し、言ひ出す奴を、今度のは、刀屋の店先でみかけたときにすぐに、松五郎がお咲をそれと知り、その故を以て後を追ひ、自分の方から五年前のことを言ひ出すことになつてゐるのである。——この運びの相違はたゞに後の二人の割臺詞をつまらなくするのみに止まらない。

役々のうち、羽左衛門の松五郎は無精で熱がなかつた。もう少し仕出來して呉れてもいゝはずである。我童のお咲は無理な役とはいへ餘りにだらしがなさすぎた。刀屋の店先へ出る湯上りの恰好の惡さの如き、とても辛抱の出來る代物でなかつた。みるなり襟もとがムズ〳〵した。——この人も土臺からかへる必要のある組である。

段四郎の眞五郎も大したことがなく、市之丞のおとらは騷々しいばかりで味がなかつた。仁左衛門の代り傳九郎の佐五兵衛は殊勝に氣を入れてゐた。但大詰はみなかつたから知らない。——最後に、委員長の稽古所の師匠は、もとこれ芝鶴のしてゐるお百の役を割たもの、それだのに、あの拵へ、あのイキは何事だらう。蓋し役がらをわきまへないものである。

（九年一月）

六月の歌舞伎座をみて

一番目の「宮内局」といふものは、もと默阿彌の「茶臼山凱歌陣立」から出たものである。默阿彌の書いたものを櫻痴居士が直し、それを、また、今度、竹柴金作がいゝやうにしたものださうである。

序幕の「大阪城内大廣間の場」は見損つたから知らない。つぎの「奥殿母子訣別の場」、二幕目の「千疊敷秀頼最期の場」「詰の丸局居間の場」、大詰の「御物見宮内自害の場」、それらのどの場を見ても、それが戰ひの最中であり、城の落ちかゝつてゐる最中であるとは何うしても思へなかつた。道具に、衣裳に、鳴物に、(二幕目の仕舞にちかく血まみれの津田左近が千成瓢簞をかついで出て來るのと、二幕目と大詰との間を遠寄でつなぐのとの外は)、まるでその心もちを傳へる用意がなかつて。從つた、重成母子のわかれでも、秀頼と、さうして、小姓たちの最期でも、そこに、何らの、哀傷らしいものも感じられなかつた。——

いつてみれば、たゞ、それだけの「陰影」のない芝居だつた。

何としても、この芝居は、團十郎でみせた芝居である。團十郎と、その當時の見物とによつて存在のあつた芝居である。歌右衛門では睨みがきかない。といふことは、あながちに、歌右衛門ばかりが悪いわけでもなく、團十郎の時分とは、見物の量見もすこしは違つて來てゐる。——たとへ、それは、銀之助以下の小姓が高慢なことをいふと、手を叩いたり、泪を零したりする善良な人たちがまた殘つてゐるにしても、こんな、とりとめのない、生半可な、生物識な、活歴時代の產物を今ごろかつぎ出すといふことは、歌舞伎座としても、歌右衛門としても、あんまり光榮なことではない。

二番目の其水作「百組出世鳶」は四五年まへに市村座でやつた「毛塚の由來」である。たが、前のときには、火事場で、百組と外の組とが消口のことから喧嘩をし、それが後の筋になつたが、今度は、なぜか、その喧嘩のくだりだけをそつくり失(なく)してゐた。で、火事はほんのつけ祭、不器用な纏もちの文次が高雄山を信心することによつて出世するといふだけの

ものになつた。しかも、その、文次が吉太郎や三八や延梅の首尾を悪くした所以の、足場のしくじりといふことか、たゞ、吉太郎や三八の臺詞でだけ傳へられる。どういふ經緯だかあんまりよく分らない。なまじ、前に、火事の騒ぎがあるだけ二幕目に文治が怪我をしてゐるのも其時のものとしか請取れない。さうかと思へば、山田の娘おはるだの、植木店の藝妓の小花だのいふ頓狂な人間が何の前觸もなく急に出て來て枷になる。——作者か作者だから腹も立たないが、だが、併し、少しいけぞんざいすぎる。

大詰の夢の場はこの前にはなかつた。次の高雄山の場はこれに似た場面が前にもあつた。チョボが入つて、たしか、小花の狂亂があつたと覺えてゐた。今度は演らなかつた。それだけは助かつた。

作は、しかく、お粗末な、心細いものだが、役者はみんな好くしてゐた。ことに菊五郎の文次がよかつた。身體のふとつてゐることも格別邪魔にならず、素直な、氣の好い、腹の綺麗な若者にあくまでなり切つてゐた。二幕目の、誰からも辛くされ、でも、誰をうら

むこともなく、一人さびしく斷念めるくだり、大詰の、それまで仕へてゐた吉太郎はたゞ育ての親といふにすぎず、生みの親は同心の坂村次郎八だと知つて、驚きながらも、吉太郎に、俺は、でも、お前の子だ、水臭くしては嫌だぜと搔口說くあたり、誇張なしに、氣障に墮することなしに、巧かつた。

默阿彌にはある拘束がある。だが、新七だの其水だのになると、纏つてゐないだけ、それがない。菊五郎の、默阿彌の芝居に仕出來さず、かへつて、新七だの其水だのゝもの、たとへば「鹽原多助」だの「牡丹燈籠」だの「名人長次」だのゝ如き人情噺をそのまゝ芝居に仕立てたやうなものに伎倆の冴えをみせる所以である。——だが、いつになつたら興行師にそれが分るのだらう。分つて、さうして、この人に、新作をあてがふ氣になるのだらう。

——思へば菊五郎といふ人も不仕合な人である。

段四郎の吉太郎は氣を入れて演つてゐた。段四郎といふ人の生地の透いてみえるほど氣を入れて演つてゐた。だが、作意からいつて、二幕目にもつと手强いところがなければ嘘

である。あれでは愚痴つぽすぎる。

吉右衞門の三八は役がらが不徹底である。これは作者がその責を負ふべきである。友右衞門の坂村次郎八は根つから詰らない。この前、勘彌がした時には、火事のあとで、怪我をした文次を戸板に乘せて運ぶうしろから、「いたはつてやれ、いたはつてやれ」と延上るやうにしながらいひかけるのが好かつた。友右衞門にはそのイキがなかつた。

中幕の「太平記忠臣講釋」は、よく出る芝居ながら、イヤな、心もちの惡い芝居である。おりゐが夜鷹に出ることもイヤなち、太市が疱瘡の子であるのもイヤである。喜内が身體もきかないくせに久しぶりで來た重太郎を口汚く罵るのも心もちが惡ければ、それをまた好いことに、眞弓やおりゐのうらみ泣を重太郎がふり切つてかへるのも心もちが惡い。それがヤマの、あとを迫ふ太市の始末に困つて、小柄でそれを刺殺すのに至つては、無慘といはうか、理不盡といはうか、われら、その、いふところを知らない。

所詮は拵へものである。喜内でも、重太郎でも、おりゐでも、また、關内でも、まんぞ

くに呼吸の通つてゐる人間は一人もゐない。皆、それ〴〵に、見當がちがひ、得手勝手であり、大篦棒である。喜内でも、重太郎でも五十兩づゝも持つてゐながら、忠義の金はつかへないとばかり、「我」を張つてみす〳〵周圍のものゝ苦しんでゐるのを顧みない。おりゐはおりゐで、自分の身の言譯が立たないとばかり、老人夫婦をあとに殘して、勝手に自害をする。つまりは徒らに歎きを重ねさせるのである。――われ〳〵からみれば不實な人間の寄合である。

役々のうち、巧いのは中丸の太市で、不味いのは千代之助の關内だつた。太市がいかにもいたいけなので一層實感を唆られた。千代之助の關内は、重太郎と並んで花道を出て來たところから、悪く反つくり返つて、みられたざまではなかつた。力彌が途迷ひした形ちだつた。厄介な役者である。（九年六月）

水中花

春

屋根〳〵を餘寒の雨の濡らしけり

春曉のあけきればまた曇りけり

水神のあたりの花や春の暮

行春や屋根のうしろのはねつるべ

鵠沼

砂山の麥畠の不二や暮の春

春雨や浮間が原の畫のほど

買ひありく世帶道具や花ぐもり

池の邊の糝粉屋淋し一の午

はつ午や宵にとゞける仕立もの

世の助の幾つの春の雛かな

雛の間へまがりて長き廊下かな

夏目先生入洛都踊のころ

葛飾「紫烟草舍」にて

蛇穴をいでゝ白秋佛かな

ゆく雁や屑屋くづ八菊四郎

花のころの花見の嘶馬樂かな

自由劇場の「タンタヂールの死」をみて

若草や鐵の扉のなかの國

夏

波うち際に犬のさびしさや皐月富士

吉原の身寄いまなき祭かな

組立やいしくもつりし一文字

濃きいろに染めしあやめや水中花

假越のやゝ落ちつきし葭戸かな

小せんを悼む

闇深きことに今宵の蚊遣かな

蚊帳つりて廊下にいでぬ今宵闇

今日ぎりになりし祭や氷水

持ち古りし夫婦の箸や冷奴

垣結へる同じ構へやほとゝぎす

女いふ

三味線を離せば眠しほとゝぎす

ふりしきる雨となりにけり螢籠

今宵淋し簞笥のうへの螢籠

金魚屋の塀のそとなり日の一時

さびしさや土用の水の水すまし

いち早き祭をどこの若葉かな

不忍や于蘭盆すぎの雲の峰

秋

踏切のあきし往來や秋の暮

玄關につけてある灯の夜長かな

たぎり立つ湯にさす水の夜長かな

温泉の町の磧に盡くる夜寒かな

高崎へ何里磯部の夜寒かな

榛名の梅が香圓朝の夜寒かな

猫八のなくこほろぎや冬隣

秋風や井戸をいでたる桴の丈

秋風の廓にちかき三輪かな

露のふるけしきに消ゆる水泡かな

菊次郎を悼む

燈籠に二十里さきの月夜かな

三七日をすぎし今宵や秋の蚊帳

淺草にうつりて蚊帳のわかれかな

海嶽二つ澄むつかのまのうき世かな

海嶽うちや廓ともりてわかれけり

奉公にゆく誰彼や海嶽廻し

お屋敷でうつと思ほゆ砧かな

とんぼとぶや青空ながら曇りそめ

冬

菊次郎の尾上

肩すべるうちかけなれば寒さかな

年の暮形見に帶をもらひけり

冬の夜や今戸八幡隅田川

冬の夜や星ふるばかり瓦竈

濡れそめてあかるき屋根や夕時雨

喜多村に與ふ

力枝にしてもおつたにしても時雨かな